

---

# ヴァイオレットリップル

唐竹十矢

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ヴァイオレットリップル

### 【Nコード】

N6531B

### 【作者名】

唐竹十矢

### 【あらすじ】

トウーラと呼ばれる魔法使いの少女達が、その村にはいた。ある夜、未熟なセウラはこっそりトウル（魔法）の練習をしていた。そこから始まる、友人フリルデとの理不尽な決闘。謎の侵入者達との死闘。少女達の思いが交錯する、たった一夜の壮絶な戦い……。

## プロローグ

### プロローグ

レラ大陸の最北端に位置するユナリス村の夜は早い。空が闇に染まる頃にはみな家路につき、月の光が現れる時間にはすっかり静寂に包まれる。

そのユナリス村の夜

空が、ゆがんでいた。

星のまたたきがかすみ、月の光がうねっていた。

星が見えなくなる。そうかと思うと、再び顔を出す。

まるで見えないカーテンが空に掲げられているかのように、不自然な何かが空の光を遮っているのだ。

それは、事情を知らぬ者が見れば、異様な光景と目に映るかもしれない。

だがユナリス村に住む者にとっては、日が暮れた後に空を見上げれば常に視線の端につきまとう、いわば日常の風景そのものであり、その存在に疑問を持つ者もいなければ、不吉の予兆として恐がる者もない。

その現象は一般に、リップル現象と呼ばれている。

リップルとは、世界のどこかにある源泉ライゼより吹き出していると言われている、浮遊物質のことである。

全世界、どこにでも存在しているが、基本的には無色透明であり、訓練を受けない限り昼間のうちに見ることは難しい。

夜になり濃度が上がると、空をゆがませる現象として、だれにも見ることが出来るようになる。

ユナリス村の周辺は、リップル現象が多く確認できる場所の一つである。

《ライゼ》が近くにあるといわれているが、確認はされていない。

## 第一章 ユナリス村のトゥーラ

ヴォワ！ 村のはずれの森の中から、すさまじい炎の柱が上がった。

その火柱は一瞬空高くにまで伸び上がり、夜の村を束の間、炎の色で照らし出した。

森の中にある一本の木が、ものすごい勢いで燃え上がっていたのだ。

火の粉がいまにもほかの木に燃え移りそうな勢いで、散っている。

「あ、あああ〜」

その、火を付けた張本人が、燃え上がる木を目の前にして、あわわ、あわわとあわてていた。

癖の強い短髪の赤毛が風に揺れ、大きな瞳は、眼前の炎にも負けないほどに赤い色に輝いている。

半袖のチュニツクを腰のベルトでしっかりと結び、動きやすそうなキュロットズボンを履いた、見るからに活発そうな娘であった。

彼女の名は、セウラという。

このユナリス村や周辺の村々には、リップルを自在に操る事の出来る者達が住まっている。

リップルは人の心に敏感に反応する物質であり、訓練することによって、念じたことを具現化させることもできるのだ。

人はそれを利用し、リップルを炎や氷を初めとした様々な姿へと変質させたり、操ったりする技術を作り出した。

そうやってリップルを操る技術のことはトゥルと呼ばれている。

そして、そのトゥルを使う者達のこと、トゥーラと名付けられていた。

セウラはトゥーラの卵であり、今はまさに修行の真っ最中だった。 「ルルナ、どうしよう〜」

セウラは背後で控えている小柄な娘に振り返った。

「がんばって〜！」

ルルナと呼ばれたのは、全身をゆったりとしたトーガに身を包んだ、小柄な娘だった。

小さい顔の上に、ちょこんとのった鼻。口の周りには、かわいらしいえくぼ。

背中 of 辺りにまで、目の覚めるような美しい金髪が流れている。

見るからにおっとりした穏やかそうな娘は、目の前の豪快な炎にもまったく緊張する様子もなく、暢気にセウラの様子を眺めている。「せえちゃんなら、消せるよ。ゆっくりやればだいじょうぶだから。まだユリノ先輩も帰って来てないから安心して」

ユリノとは、師匠亡き後、彼女たちの師匠代わりになっている姉弟子のことである。

彼女は、自分の目の届かないところではトウルを使ってはいけないと、セウラに堅く言いつけている。

ルルナ達にはそのような言いつけはされていない。

なぜセウラだけ使ってはだめなのかといえば、トウルの扱いが極めて下手だからだ。

炎の加減に失敗して、森の一面を大火事にしてしまったこともある。

その時は、師匠や村人達の尽力によりなんとか炎を食い止めることが出来たが、それ以来、絶対に師匠やユリノの目の届かないところでトウルは使うなど、念を押されているのだ。

ちなみに、その燃えた森の一面は草木一本生えない荒地と化してしまったので、村人が仕方なしに開拓して、今では広場になっている。

広場の名称は、《セウラ広場》。

無論、正式名称ではなく、誰かが勝手に名付けたものだ。

セウラは絶対に認めようとはしていないが、村ではすでに定着してしまっている。

それはともかく、セウラはトウルの扱いが下手な上に、自習も出

来ないとあつて、ルルナたちに比べるとすっかり落ちこぼれてしまっていた。

それをなんとか挽回するために、ユリノの留守を見計らってこっそり練習をしていたのだが、その結果がこれであった。

「ええと、ええと!？」

セウラは大あわてで気持ちを集中させようとしますが、そうすればするほど、気が散ってなにも出来なくなる。

「精神集中だよ、精神集中」

「うっ、うっ……」

半ば泣きそうになりながら手を振りかざし、念を込めると、炎の周りに薄い氷の膜が張った。

「やっ……!!」

バンザイをしかけた。が、たちまち氷は溶けて消え、炎はあたりまえのように元の勢いに戻ってしまう。

「ルルナあゝ」

セウラはガクンと肩を落とし、恨めしそうに振り返った。

「がんばって」

それに対して、ルルナはたのしそうに手を振っている。

「せえちゃんなら出来るよ」

その友人の力を信じ切ったような満面の笑みが、セウラには悪魔のように見えた。

「うっ」

半ばあきらめ顔でセウラは炎の方へ顔を戻す。

「あ、そうだ」

ルルナはひらめいたようにパチンと両手を合わせた。

「せえちゃん、目、つむってみて」

「目？」

「うん。そうして、おなかの力を抜いて、おおきく鼻から息を吸ってみて。そうして、ゆっくり吐いてみるの。それを、十回くらい繰り返してみて」

「え……、うん」

訳がわかっていなかったが、セウラは言われたとおりやってみた。目をつむって、息を吸い、ゆっくり吐く。

最初の二、三回目こそ、それどころじゃないといらついていたが、繰り返すうちに、だいぶ心も落ち着いてくる。

一通り終えて、再び開かれたセウラの目には、先ほどまでには見られなかった、落ち着きの色が現れていた。

「なんか、いい感じ」

心機一転。セウラは思い切り息を吸い込み、気合いを入れた。

「ようし！」

燃えさかる木に向かって、手を振り上げた。

たちまち、真っ白い氷が炎を取り囲んだ。ビシビシ！ と、激しい氷結音が響きわたる。

炎は消えるどころか凍り付き、一瞬の後には木の形をした氷柱がそこに鎮座していた。

「すごっ！」

その予想以上のできばえに、セウラは両手をあげて飛びはねた。

「ルルナ、すごいよ！ わたしこんなにすごいこと出来たんだ！

ルルナのおかげだあ！ もうこれで、フリルデになんて」

「呼んだ？」

驚喜に水を差すような冷めた声が、そばにある木の背後から、響いてきた。

「あらあら、セウラってすごいねえ。これを自分で凍らせたの。

フーン」

「フリルデ……」

フリルデ、そう呼ばれた娘は、隠れていたのだろう、木の背後から突然姿を現した。

灰色のワンピースの上に、薄手のケープを羽織っており、細い腕には乳白色のブレスレットが光っている。

つり上がり気味の目と、整った鼻梁、頬からアゴにかけてのライ

ンは鋭い。

ハツとするほど肌は白く透き通り、蒼く濡れた唇は薄い。背丈はセウラよりもほんの少し高いが、すらりと伸びる肢体はセウラのそれよりも細い。

長い灰色の髪は途中で一つに結ばれ、腰のあたりで尻尾のように揺れている。

氷の剣を思わせるような、鋭い雰囲気を漂わせた娘だった。

「ふうちゃん……」

ルルナは少し遠慮した様子で、フリルデに呟いた。

「だからその言い方がいい加減にやめてよ。みつともない」

フリルデは威嚇するようにルルナに目を向ける。

「フリルデって呼んでって何度も言ってるでしょ」

「でも……」

小さい頃からずっとそう呼んでたんだし。そのほうがかわいいし……。

ルルナは小さくなってぶつぶつ言い訳していたが、フリルデは気にする様子もなくセウラのほうに向き直る。

「で、特訓の成果があれなわけ」

「……」

セウラは顔を真っ赤にして、言葉もなく目をそらした。

「さすがセウラね」

「なにしに来たんだよ！」

さすがにセウラも気がついてた。

木を凍らせたのはセウラではなく、いつの間にか近くに潜んでいた、フリルデであるということ。

彼女は今でこそ嘲笑で済ませているが、あとでセウラがいなくなつたあとに腹を抱えて笑うのだろう。

そう思うと、恥ずかしいやら恨めしいやらで、本気で目の前の修行仲間をぶん殴りたくなってくる。

「人の特訓台無しにしゃがって！」

「しゃがって。下品な言葉ね。お似合いだけど」

「ルルナ、帰ろう。今日は疲れた」

不機嫌に大股になってセウラは立ち去ろうとするが、フリルデに腕をつかまれる。

「待ってよ。用事があるからわざわざ来たのよ？」

「わたしに用事？」

セウラは面倒くさそうに振り返る。

「なんのようだよ」

フリルデは質問にすぐには答えずに、ルルナのほうを見た。

「ルルナ。先に帰ってて。お願い」

「え？」

「二人っきりの、大事な用事なの」

言葉ではお願いと言っているが、どこか脅迫じみた力がその言葉にはこもっている。

ルルナは何と返事をしていいのか迷った様子で、目を泳がせていたが、

「お願い」

と、もう一度念を押されると、「え、うん」と気圧されたように頷いてしまった。

「ちよ、ちよつとルルナ！」

セウラとってはたまらない。

こんな森の中でフリルデと二人っきりになったら、何をされることか。

助けを求めるようにルルナに手を伸ばそうとするが、フリルデはつかんだままの腕を放そうとしない。

「セウラ、あなたはこっち」

「ルルナあゝ」

そのままセウラは、森の奥へと引つ張り込まれていった。

## 第一章 (2)

夜の森は恐ろしい。

森は怪しげに暗く、さわさわと葉のこすれる音ばかりが響いてくる。

同じような木ばかりで方向感覚もあやふやになるし、オオカミやクマなど獣も住まっている。

下手をすれば出られなくなる危険もある。

「いったい、なんのようなんだよ……」

森の少し奥まったところへ案内されたセウラは、不安げな面持ちで恐る恐る聞いた。

「そんなに恐がらないでよ。セウラ」

フリルデは、振り返った。その口元には、セウラを気遣うかのごとく微かな笑みすら浮かんでいる。

(うわぁ……)

たちまちセウラの全身に鳥肌が立った。

好意的なフリルデ。セウラにとってそれは、森の夜よりも遙かに不気味なものだった。

「わたしたちもいろいろあったわよね。喧嘩もよくした。でも、もうそろそろ十六。成人だし。ねえ、今までであったことは水に流しましょよ」

「はぁ？」

いきなり何を言い出すのか。まったく意図が読めない。それがまた、恐ろしい。

「だってそうでしょう？ いつまでもいがみ合っている、お互い傷つくだけだわ。これ以上先輩に私たちのことで迷惑なんてかけられないし。そう思わない？」

「え、まあ、そりゃ、そうだけど……」

「でも、その代わり、やっておかなければならないことがあると思

うの。あなたも、いつかはそうしななければならないと思ってること  
でしょうし」

「なにを……？」

セウラは眉をひそめた。心当たりが、まるでない。

「先輩もないことだし」

フリルデの笑みが、いつそう広がった。

「決闘しましょ？　そうして、わたしたちのリーダーを決めるの！」

「へ？」

フリルデは問答無用とばかりに手を振り上げた。

たちまち、空気が冷たくなっていく。

「ちよつと、決闘ってなによ！　意味がわからないよ！」

「戦わないなら、わたしの勝ちになるわよ！」

ふと、セウラは足元に違和感を感じた。視線を落とすと、いつの間にか足下が凍り付いていた。

「うわ！」

あわてて足をふるって氷を払う。あやうく氷で足を固定されるどころだった。

「ちよつと、あんた正気じゃない！」

言い捨てて、セウラは背中を向けて逃げ出した。

「逃がすもんですか！」

フリルデも、後を追いかける。

そうして二人は、森のいつそう奥へと消えていった。

風が強くなり始めていた。

静寂の森の中に、激しい息づかいと足音が響きわたる。

額に汗をにじませて、セウラはひたすらフリルデから逃げていた。

「うあ！」

セウラは悲鳴を上げて転がった。木の根に足を引っかけたのだ。

受け身もとれずに豪快に地面にたたきつけられたその体は、すで

に土ですっかり薄汚れてしまっている。

無意識のうちに木の枝や葉にこすってしまったのだろう、腕の所々から血がにじんでいる。

「くそ、フリルデのやつ……。なにが決闘だよ。わたしが勝てるわけないってのに」

セウラは忌々しげに呟いた。

くやしいことだが、『決闘』などするまでもなかった。

セウラはトウルの基礎である炎のトウルすらまともに扱えない。

その反面、フリルデは一通りのトウルを上手に使いこなせる。特に氷のトウルを操ることにおいては、先輩ですらかなわないかもしれない。

実力の差は、歴然としている。

なのに、なぜ今さら『決闘』などしなければいけないのか。これはもう、新手的イジメとしか思えなかった。

(先輩に叱られても知らないからな……)

足音が近づいてくる。セウラはすかさず木陰に身を隠した。

「消えたわね」

フリルデは、余裕の笑みのくすぶるその口をゆっくり開いた。

「どうせこのあたりにいるんでしょう？ セウラ？」

図星を突かれたセウラは、未だに整わない息が漏れそうになる口を片手でふさぎながら、四つんばいの姿勢で少しずつ遠ざかっていく。

「どこにいるの？ セウラ。早く、まいった、っていつちやいなさいな」

(じょうだんじゃない)

小さくつぶやきながら、逃げる。

勝ち目はないとわかっていても、こんな不意打ちにも近い理不尽な『決闘』で負けを認めるのは、セウラのプライドが許さない。

「ねえ、逃げないでいい加減に決着付けちゃいましょうよ。いずれリーダーは決めなきゃいけないんだからさ。先輩も今日は用事で出

かけてることだし、今日しかないと思わない?」

(それなら正々堂々と戦ばいいじゃんか)

聞こえないように、口の中だけで反論する。

(なんで先輩に隠れる必要があるんだよ)

ひっそりと反論している間にも、フリルデの講釈は続いている。

「ルルナは確かによくできるけど、でもね、あの子じゃのんびりしすぎてると思うのよ。端っこのほうで補佐する方が向いていると思うの。そうだと思わない? わたしみたいにもっと冷静で、テキパキと仕事をできる方が、リーダーには向いているの」

(仕事が出来たって、その性格じゃどうしようもないだろ……)

フリルデはセウラに背中を向けた。どうやら反対側を探し始めたようだ。

セウラはその隙に、ゆっくりと立ち上がった。

(そりゃあんたよりトウルがへったくそだったのは認めるけど。でもね。あんたの下で働くなんてじょうだんじゃないっつーの)

何かという見下してくるフリルデがリーダーになるなど、考えるだけでもゾツとする。

そんなことになったら、一生見下されて生きなきゃなくなる。

(このままダッシュで村まで逃げよう)

セウラは覚悟を決め、思い切って足を踏み出そうとした。が、

(え……?)

足が動かない。

いつの間にか、足下が凍り付いて地面に固定されてしまっていた。

「引つかかったわねえ。ネズミさん」

力を込めて足を抜こうとした時には、フリルデのいやらしい笑みが眼前にあった。

「先輩も言ってたわよね。トウーラ同士の戦いは、まず結界に気をつけるよ」

「けっかい!?!」

セウラは素っ頓狂な声を上げて、周りを見回した。

目をこらすと、周辺一帯がぼんやりと青い。無色透明のはずのリップルが、微かに色を帯びていた。

「おや？ なにあわててるの？ まさか結界の意味も知らないなんて言うんじゃないでしょうね」

フリルデはセウラの顔を、苦笑に満ちた目で見下した。

「空間に漂うリップルは、強い念を込めることで、自分の色に染めることが出来るの。そうやって空間のリップルを自分が独占することを、結界っていうのよ。そうすれば、ほら」

セウラの悲鳴が響いた。みるみるセウラの右足が氷で固まっていく。

「その空間のリップルは、すべて自分の思うがままに操れる。つまりトゥルが、楽になおかつ強力に使えるってこと。同時に、ほかのトゥーラはトゥルが使えなくなる。人間は自分でリップルを作り出すことは出来ないからね。わかった？」

にゆう、と顔を突き出して、フリルデは言った。

「一つ、賢くなったわね」

「そ、そんなことは知ってるよ！」

セウラは顔を赤くしてまくし立てる。

「わたしが言いたいのはそんな事じゃない！ なんでこんな所におまえの結界が張ってあるんだってこと！ 結界はそんな短時間じゃ張れないだろ。おまえ、決闘とかいって最初から用意してただろ！」

「うるさいわねえ」

フリルデはわざとらしく耳を手で仰いだ。

「畏つて言葉知ってる？ 実戦ではこういう事がいくらかでも起こるのよ？ あなたは敵にまでそんなこと言って恥をさらすつもり？

結界に気がつかなかったあなたが悪いの」

「そういうのを詭弁って言うんだよ！」

「あら……」

本当に驚いたような顔をして、フリルデはセウラの顔をまじまじと見つめた。

「あなた、そんな難しい言葉どこで覚えたの？ 絵本にはないわよね？」

「バカにすんなあ！」

セウラは無理矢理氷の縛めから足を引き抜き、拳を握ってフリルデに飛びかかった。

「ふ」

フリルデは笑い捨てた。持ち上げた指先の周りの空間が青色に歪む。

指の先から氷の塊が飛び出し、それが勢いよくセウラの胸に炸裂した。

「うぐ！」

セウラの身体が吹き飛び、地面にたたきつけられる。

胸を押さえて咳き込むセウラに、フリルデは再び人差し指を向けた。

「早く観念しなさいな。わたしだって、いつまでも弱いものいじめみたいなことしたくないんだけど。ん？」

言っている途中で、フリルデは興味深げに目を瞬かせた。

胸を押さえながら立ち上がったセウラの目つきが、鋭さを増しはじめたのだ。

中腰になり、握った拳を引き、フリルデをジッとにらみ付ける。

セウラがトウルを使う時の構えだった。

「いい加減に、負けを悟ったら？」

フリルデは、すっかり冷めた目でセウラを眺める。

「ここはわたしの結界の中なんだからさ。トウルが使えるわけがないのに」

「うるさい！」

「おやまあ。威勢がいいわねえ。まあ、やればいいわ。その代わりにこれで負けたらあなたは一生わたしの靴磨きよ」

「じゃあ、わたしが勝ったらおまえは一生便所掃除だ！」

「便所って……、あなた本当にそういうのが好きね」

「う、うるさい！」

セウラは握った拳を振り上げる。が、やはりなにも発生しなかった。

フリルデは声を上げて笑った。

「だから結界の中で他人がトウルを使う事なん」

途中、勝ち誇った笑みが、そのままの形で固まった。

森が明るくなった。

セウラのかざした右手から、一テンポ遅れて炎が勢いよくあふれ出したのだ。

「う、うわぁ！」

だが、悲鳴を上げたのもセウラの方だった。

猛烈な炎が、噴水のように頭上たかくにまで吹き上がったのだ。

それをうまく制御することがセウラにはできていなかった。

「あはは！ 間抜けな絵ね！」

フリルデは思いがけず中断された笑いを、改めて続けた。

「相変わらず限度を知らないんだから。あなたのそのバカ力だけは認めざるを得ないわね。でも、また火事起こす気なのかしら。《セウラ広場》は一つで十分よ？」

「そうだ……。それだ」

脂汗をしたたらせながら、セウラは言った。

「あの広場にその名前を付けたの、おまえだろ。ティルくんが言うてたぞ」

「ええ、そうよ？ いい名前でしょ」

「ふざけんなあ！」

燃えさかる炎を無理矢理押さえ込んで手をぐうに握り、フリルデに向かつて拳を繰り出そうとした。

その時であった。

「おい！」

男の声が響いてきた。

「え？」

二人の視線が同時に声の方に向けられた。紫色の瞳と、後ろに束ねた漆黒の髪が印象的な青年が、そこにいた。

柔らかな顔立ちによく似合う細身の体をしていたが、その体はよく鍛えられているようで、上背はがっしりとしている。

汗のにじんだ上半身は薄着一枚。その上に風よけのマントを羽織っており、腰には剣が揺れている。

セウラはこの青年を知っていた。同じ村に住んでいる、知り合いの青年シュレだ。

「ちっ！」

たちまちフリルデは顔をゆがました。舌打ちを響かせ、あっさりとどこかへ走り去っていった。

「はは、逃げた。まるで悪役だ……」

セウラはぎこちなく笑いながら、おおきく息を吐き出した。

拳からの炎が消え、脱力して倒れそうになる。それを青年がすかさず支えた。

「だいじょうぶ？」

「え、あ……」

セウラは顔を赤くして逃げようとしたが、まるで身体が動かなかった。

「シュレ、なんでこんな、所に……」

そこまで言うのが、精一杯だった。

今のセウラには、口を動かす力さえ残っていないかった。

ルルナとさんざん訓練を続けてきたことに重ね、フリルデとの『

決闘』で、身体はむろん、精神がずたずたに疲労していた。

これまではどうにか誤魔化してきたが、『決闘』が終わって緊張の糸が切れたことによって、ドツと疲れがあふれ出した。

「セウラ、だいじょうぶか！」

シュレの声を耳に残したまま、セウラは深いまどろみの中へと落ちていった。

ヴァイオレットリップル

## 第二章 侵入者

### 第二章 侵入者

すでに日が落ちて遠い。

リップルにゆがまされた月の光が、落ち尽きなくユナリス村を照らしている。

日が暮れた後に外を出歩く者はほとんどおらず、村は無人の廃墟のごとく、音もない。

その人気のない夜道を、二つの人影が歩いていた。

一人は、ルルナであった。

夜の闇が怖いのか、不安そうな面持ちで静寂に沈んだ村を見回しており、たまにどこかで物音が立つと、ビクツと身を縮める。

「あの、バカ」

「え!？」

傍らのもう一つの影が不意につばやいたので、ルルナは思わず怖じ気づいた声を上げてしまった。

「……どうかしたんですか？」

首を傾げてルルナに視線を返したのは、シャツと半ズボンを着た軽装の少年であった。

耳の辺りまで伸びた髪は灰色がかっている。

白い肌につりめがちの目。唇も薄く、細身の剣を思わせるようなどこかツンツンした雰囲気を漂わせている。

「いや、なんでもないの」

ルルナは照れて笑った。

「で、でも、バカつて、ふうちゃんのこと?」

「それ以外に、だれがいるんですか」

「え、でも……」

数回瞬きしたあと、少年をあやすように言う。

「お、お姉ちゃんのことを、そんなふうにつつちゃいけないよ、ティルくん」

ティルと呼ばれた少年は、フリルデの弟である。帰りの遅い姉を探していたところで、帰る途中のルルナと出会った。

そしてルルナからフリルデとセウラの事情を聞いて、その場所まで案内してもらったのだ。

「バカですよ。本当に」

ルルナの言ったことを早速無視して、ティルは続ける。

「だってそうでしょう？ 今日、頼りになるユリノさんがいないんですよ？ こんな時はちゃんと家で待機してなきゃいけないんですよ。だいたいあいつは、普段からトウーラの自覚が足りないんだ。セウラさんばかり目の敵にしてさ。そうだと思いますか？ ルルナさん？」

「え、うん……」

さすがフリルデの弟といったところか。その目つきだけはフリルデを思わせるほどに鋭い。

ルルナは年下の少年にすっかり気圧されて、ろくに反論も出来なかった。

「だけど……」

「ルルナさんも甘いですよ。ユリノさんがいない時を見計らってセウラさんに大事な話って、絶対ろくなことじゃないですよ？ あいつの考えることは、いつもろくでもないんだから」

「そ、そんなことないと思うよ？ 何か、ちゃんとした考えがあるんだと思うよ？」

ルルナには、両親もいなければ、兄弟もいない。幼い頃に両親をなくして、師匠に保護された孤児だからだ。

それはルルナに限らず、セウラ達この村のトウーラは皆、そういうた孤独な境遇な者達であった。

フリルデに弟がいるというのは、数少ない例外である。

孤児なためか、ルルナは家族というものに強い憧れをいだいており、必要以上に神格化するきらいがあった。

お互いが尊重し、大事にしなればいけないという思い込みも強く、尊重どころかあからさまに姉のことを罵倒するティルには、すっかり目を丸くしてしまっている。

「何か、本当に事情があるんだと思うよ。そんなに簡単に、バカだなんて決めつけちゃ、お姉ちゃんがかわいそうだよ？」

「バカですよ」

ティルは言い捨てた。ルルナのぎこちない笑みが、硬直して、動かなくなる。

「そんな。お姉ちゃんがかわいそうだよ……」

「かわいそうってどこがです。だいたい、ユリノさんにこのことが知れたら　って、ルルナさん？」

ルルナの顔を見上げて、ティルはギョツとした。今にもこぼれ落ちそうなほどに、ルルナの目に涙がたまっていたのだ。

「ティルくん……」

恨めしそうに、ルルナは何かを言おうとしていたが、しゃくり上がって声にならない様子だった。

「おねえちゃんのことお……」

「え、あ、うん、ご、ごめんなさい……」

ティルはしどろもどろになりながら、両手と首をぶんぶん振る振る。う。

「バカじゃないです、バカじゃないですって！」

「本当に？」

「え、は、はい」

「じゃあ、もうお姉ちゃんのこと、バカだなんて言わないでね。あとで、ちゃんと謝ってね？」

満面の笑みが、ティルに降りかかる。

「わ、わかりました」

ティルは顔を引きつらせて同意すると、ルルナから逃げるように、

ヴァイオレットリップル

村はずれの森に向かって足を速めた。

## 第二章 (2)

(くそ、セウラのやつ……)

一方フリルデは、弟の事などむろん頭の中にはなかった。

思いっきり全速力でシュレから逃げてきた後、悔しさに顔をゆがませながら、木によりかかって息を整えていた。

(なんであんな所にシュレがでてくるのよ。せっかくあいつをやっつけるチャンスだったのに。くそ！)

八つ当たりをするかのように、木を何度も殴りつける。しばらく殴ったあと、身体の衣服に付いたほこりを払う。

「本当に格好悪いわ……」

適当に森の中を走ってきたので、ずいぶん奥にまで来てしまったようだった。

カサ、コソ、と、どこかから何かか葉をこすらせて歩くような音が聞こえてくる。森に住まう、獣かも知れない。

フリルデは、ぎこちなく笑った。

(まあ、こういう散歩も……悪くないわね)

誰が見ているわけでもないのに、余裕であることを見せつけるようにわざとゆっくり歩くのは、フリルデの微かな意地だった。

(セウラなら、声を上げて走り回るんでしょうけど)  
だが

だれかが落ち葉を踏みしめるような音が耳をたたいた時には、思わず悲鳴を上げそうになった。

顔を真っ青にして、身を堅くする。

(た、たた、狸か何かよ……)

心臓の高鳴りを押さえつけるように胸に手を当て、自分に言い聞かせながら木陰に隠れる。

しばらくしてやってきたのは、狸などではなかった。

(なに、あいつら……)

見たことのない、二人連れであった。

一人は、黒いローブをまとった小柄な少女だった。

不機嫌そうに唇を突き立て、眠たそうな目つきであたりをボンヤリと見回している。

紫がかつた短めの髪は無造作に跳ね上がり、背中はけだるそうに丸まっている。

その様子は、まるで寝起きた。

もう一人は、背の高い男。歳は二十代の半ばといったところか。

少女とは対照的に姿勢がよく、背中もピンと張っている。

幾何学模様の装飾の施された、ゆったりとした衣服をまとい、それを腰のベルトで止めている。

ベルトには剣が携えられており、背中にはバックを背負っている。その顔立ちはアゴが鋭く、目も鋭い。全体的に角張った感じのする男だ。

（盗賊にしては変な格好だけど。どちらかといえば、トウーラかな。たった二人で村を襲うつもりかしら……。とにかく誰かに知らせなきゃいけないわね）

二人が遠くへ離れたのを確認すると、背中を向けて急いで足を踏み出した。

（でも）

二、三步走つたところで、その勢いは止まった。

（もしかすると、これってチャンスなんじゃないかしら。一人で盗賊を退治したとなれば、もう、セウラのバカもわたしを認めないなんて言えないでしょうし）

その口元が、ゆるむ。

（日が上る頃には、わたしって村の英雄になつてるんじゃないかしら！）

宝物を見るかのように瞳を煌めかせ、二人の背中に向かって振り返った。足音が響くのも気にせず追いかける。

「待ちなさいよ、盗賊ども！」

フリルデは大声で叫んだ。

「わたしたちの村に忍び込もうなんて、いい度胸じゃない！ わたし、フリルデが退治してあげるわ！」

「……」

怪しい二人は、特におどろいた様子もなく振り返った。

少女の目が、見定めるようにフリルデの全身をくまなく見つめてくる。

「な、なによ……」

なんだか恥ずかしくなって、思わず手で胸のあたりを隠す。

「あれですか？」

男も同じようにフリルデを眺めながら、隣の少女に声をかける。

「ちがう」

「そうか、違いますか」

「ちよつと！」

フリルデは荒げた声を挟んだ。

「ちがうってなによ！ あんたたちも名前くらい言いなさいよ」

娘はその激情に首を傾げていたが、男と目配せをしたあとに、おもむろに口を開いた。

「リリ。わたしの名前」

「リリ……？」

そう名乗った少女。フリルデは目を何度か瞬かせた。

遠慮することもなく、連中がやったのと同じように、ジッとその顔や身体を眺める。

間近で見ると、紫色の目が妙に印象に残る。

（あの目……）

「わたしは、ハスナ」

「そう」

一応男のほうも名乗ったが、フリルデはリリのほうに夢中で上の空だった。

（あの、色……）

最初威勢のよかったフリルデがおとなしくなってしまったのを、二人は物珍しそうに眺めていたが、

「あ」

と呟いて、リリが顔を上げた。

「森を抜けていく。このままだと見失う。行こう、ハスナ」

「そうですね」

もはやフリルデは興味も失ってしまったかのように、二人は背中を向けた。

「たしか」

フリルデはなんとなく、つぶやいた。

「そうだ、シユレだ。同じ色……」

二人の足が止まった。

(え……?)

いやな予感がしてあわてて口をつぐんだが、もう遅かった。

「シユレ？ 紫色の目を持つ者を、知っているのですか？」

ハスナはフリルデに振り向いた。

「わたしは、あれ、を追う。ここは任せる」

「わかりました」

リリはそのまま去っていった。それを見送った後、男は満面の笑みでフリルデに語りかける。

「教えてもらえませんか。リリ、と同じ目をした者を、知っているのですね？」

「さあね」

フリルデは小馬鹿にするように言い捨てた。

「ぜんぜん、知らないけど？」

「教えるつもりがないのなら、別にかまいはしません……。痛い目を見るな！」

ハスナは腰の剣を抜いた。瞬時にフリルデに向かって踏み込み、素早く剣を繰り出した。

フリルデは鼻で笑って飛びすさった。

「わかりやすい不意打ちね。殺気でバレバレ」  
そして開いた右手をかざす。

「《白の晶剣》」

言うと、その手の回りにたゆたうリップルが青い色に染まり、剣の形を成していく。

「剣術なら、わたしも少しは自信があるわ」  
フリルデは不敵に笑った。

頭上に滞空するそれを握りしめ、一度素振りをする。

ブン、と空気の切り裂かれる音と共に、白い結晶が剣から吹き上がる。

剣の出来に満足そうに頷きながら、ハスナを見据えた。

「そんな華奢な身体で、よくもわたしたちの村を襲う気になれるわね。剣技もはつきり言って甘いし。あんた、まともに朝日は見られないと思っただほうがいいわよ」

「それはそれは」

ハスナは笑みをにじませた。

「ずいぶんと余裕ね。こんな小娘相手にならない。そんなところかしら。あんたの考えてること」

「さあてね」

「そう言う態度は、むかつくのよ！」

白い結晶を振りまきながら、今度はフリルデが踏み込んだ。

ハスナは振り下ろされる氷の剣に向かい、自らの剣を振り上げた。  
ガ！ 二つの剣が激突した。

その瞬間だった。ハスナの剣に氷が走った！

ハスナは微かに呻いた。反射的に剣から腕を放し、飛びすさる。  
「おいしいわね」

重そうな音を立てて地面に落ちたハスナの剣は、すっかり氷で覆われていた。

フリルデは氷の剣を軽く振る。

「わたしの剣は、触れたものをすべて凍らせる。もう少しで、あな

たの氷柱が出来ていたのに」

「ほう」

ハスナの口元が、何かに満足するかのようになり、ほころんだ。

「なかなか華麗でお美しい技をお持ちのようですね。才色兼備、とはこのことですね」

「気持ち悪いお世辞ね。早速命乞いかしら？」

「どうですか？ わたしの元で働いてみるつもりはありませんか？」

「あなたの元で？ わたしに盗賊暮らしをしろとでも言うの？」

「あなたは運がいい。確かに今日までは盗賊まがいの生活をしていましたが、日が上る頃には、わたしは世界でもっとも偉大な存在になつていられると思いますから。あなたは、その元で働けるのです」

「なに、それ」

「あなたは、グーマという男をご存じか？」

「グーマ……？」

「知らないのですか？」

「知ってるわよ！ 昔話に出てくる魔王の事よね？ 知らないわけがないでしょ」

「ご名答です。では、彼には《ミレス》と呼ばれる有名な八人の下僕がいましたよね。すべての名前は言えますか？」

「え」

フリルデは微かに目元を引きつらせた。

「ええと、ディラッタ……」

指を折りながら、脳から絞り出すように名前をあげていく。

「アンガラでしょ？ メビーメリ、リリダロス、ええと……」

フリルデは顔を上げて必死に思い出そうとしていたが、不意にハツとなって声を荒げた。

「そ、それがどうしたって言うのよ。なんであんなにそんなこと答えなきゃならないのよ」

「ただ聞いただけです。別に思い出せなければそれでいいのです。その程度も思い出せないのか。言葉とは裏腹に、ハスナの目には」

侮りの色が露骨に現れている。

(こんのやろう……！)

今すぐ飛びかかって凍り付けにしてやりたかったが、ここでムキになっただけです。思いますが、こみ上げてくるものをがんばって飲み込んだ。

「ちなみにあとの残りは、ククスと、シユレルダ、ラクナス、セーゲ、ですよ。覚えて置いたほうがいいですよ。教養ですから」

「別に思い出せなかったわけじゃないわよ」

「で、もう一度聞きますが、わたしの部下になるつもりは？」

「まだいつてるの」

ハスナをにらみ付ける。

「誰があんたなんかと……。死んでもいや」

ハスナは肩をすくめた。

「そうか、残念です。まあ、連中を全て思い出せないような頭の悪い人間を部下にするつもりはありません。あなたはどっちにしろ不合格です」

「な……！」

フリルデは顔を真っ赤にして反論する。

「だから言わなかったのは、あんたの質問に答える必要がないからだって言ったでしょ！」

「そうですね」

ハスナはにんまりと笑った。

「まったくその通りだと思いますよ。はい。では、そろそろ雑談はやめにしましょうかね」

ハスナは両手を広げた。彼の周りでリップルが揺れはじめる。

フリルデは用心して氷の剣を構えようとした。

その瞬間だった。

パン！ 何かの弾けるような凄まじい炸裂音が響いた。

(んっ！？)

思わずフリルデは目を閉じた。耳が痛くなるほどに激しい音だっ

た。

目を開いた時、その目は必要以上に大きくなった。構えた氷の剣が、粉々に砕けていたのだ。

呆然としているヒマはなかった。

再び炸裂音が響き、フリルデの右肩に衝撃が走った。

「くっ！」

鮮血が散った。激痛に顔をゆがむ。

何かハスナの手から放たれた様子はない。まるで空気が、突然爆発したかのようだった。

「なに、いまの……」

フリルデの右手がぶらりと垂れ下がる。肩に激痛が走って腕を上げられない。

「《虚空の叫声》。空中に存在するリップルを炸裂させるツールです」

ハスナは片腕を振り上げた。

炸裂音が響き、フリルデの左足の太股のあたりが弾けた。立っていられずにひざを地面につく。

「これでもう剣は振れませんね。さて、これであなたに勝ち目はなくなつたわけですが、最後に一つ聞きましょうか。シュレ、とは何者です」

「知らないわ……」

「答えてくれれば命までは取りませんから、言ってくれませんかね。シュレとは何者ですか？」

「誰があんななかに！」

フリルデは無理をして立ち上がり、左腕を振り上げようとした。  
「……」

が、何かを思い出したかのよう途中動きを止め、下ろす。

「観念したのですか？」

「誰が」

フリルデは背中を向け、片足を引きずりながら走り出した。

「どうかしたんですか？ まさか逃げるとでも？」

ハスナは少し用心して間合いをとりながら、フリルデの背中に右手を向ける。

「ねえ」

バン！ 炸裂音が響いた。

フリルデの背中が弾け、静寂の森を悲鳴がつんざいた。それでもフリルデの足は止まらなかった。

いや、それどころか、

「くそおっ！」

痛みを紛らわすように叫び、全力で走り出した。傷口から、みるみる血があふれ出す。

「なんて迫力で逃げるんでしょうかね」

ハスナは鼻息を響かせた。先ほど落とした剣を拾い上げ、フリルデを追う。

フリルデは左足に傷を負っている身である。どんなに気合いを入れて逃げようとも、ハスナの足を引き離すことはできない。

「ねえ、ねえ」

ハスナは遊ぶようにその後ろを付いていく。

「逃げ切れると思っっているのですか？ ねえ、本当に思っっているのですか？ なんてそんなにがんばってるんですか？ ちょっとは命乞いしようとは思わないのですか？ 殺しちゃっていいんですか？ ねえ」

興味津々で質問を浴びせかけながら、《虚空の叫声》を放つ手も休めない。

無防備のフリルデの身体に、ハスナの攻撃が連続して襲いかかる。フリルデは全身を血に染めながらも、ひたすらに逃げた。が、

「うっ……」

ある程度まで逃げたところで、ついに力尽き、崩れ落ちる。

「たいした根性です。だが、判断は愚かきわまりないですね。その逃げた時に見せた気迫をわたしにぶつけていれば、勝機もあったか

も知れないというのに。……いや、無理か」

ハスナは一人で笑い、フリルデの髪をつかんで無理矢理身を起こさせた。

「もう休みたいでしょう？ 言うてください。シュレという男」

その言葉が、止まった。

「なにがおかしい」

フリルデ表情。疲れ切ってはいたが、笑っていた。まるで勝ち誇っているかのように。

「バーカ」

フリルデは左手で小さい《白の晶剣》を作り出し、振り上げた。

「おっと」

傷を負う腕で振り上げた氷の剣は緩慢で、ハスナは後ろへ飛びすさって簡単にかわす。

「この期に及んで強がりですか。まあ、あなたから聞かなくても、自分で調べればいいことですしね」

彼はいやらしく微笑み、トドメとばかりに手を振り上げた。が、

「ん……？」

なにもおこらなかつた。

何度も手を振るうが、お得意の《虚空の叫声》はまったく発動する気配はない。

次第にその顔から余裕の色が消えはじめる。

「ほづら、間抜けね。周りを見てみたらどう？」

フリルデに言われたとおりにし、ようやくハスナは気がついたようだった。

「これは、結界……」

周辺一帯にぼんやりと青い色をしたリップルが漂っていた。

「ようやく気がついた？」

フリルデは身体の痛みも忘れて、声を上げて笑った。

「わたしが逃げる？ バカなこと言わないで。ここにおびき寄せたのよ」

「しかし、なぜこのようなところに結界が……」

「もちろん、あんたを倒すためよ」

むろん、ウソであった。セウラと『決闘』するために作っておい  
たものである。

実際は、かなりの賭けであった。

結界はその場所に周囲のリップルが流れ込むことによって、徐々  
に薄まり四散する。

消えている可能性は十分にあった。

まだ残っていたことにへたり込みたくなるくらいほっとしていた  
が、内心は微塵も表情に出すことなく、フリルデはあたりまえのよ  
うに言った。

「わたしって、用意周到なの」

念を込めると、周辺一帯に白い霜が降り始める。

「あんた、終わったわね」

「ふざけるな……。だが、おまえなど、トウルがつかえなくとも！」

ハスナは剣を構え、フリルデに迫ろうとした。が、地面から生え  
だした氷が、彼の両足をすっかり固めてしまっていた。

足からひざ、腰、腕、胸とみるみるうちにハスナの身体は凍り付  
いていく。

「バカな、こんなことが……」

すでにハスナの表情に余裕はなかった。すでに凍り付いてしまっ  
たかのように、真っ青に染まっている。

「ふふ。勝った」

フリルデは勝利を確信して、ひざをついた。

「これで、わたしは村を救った英雄ね。我ながら、すごいわね。ふ  
ふ。すごい、わね……」

ぎこちなく笑いながら、その身体を地面に埋めた。

### 第三章 ユリノ帰還

森を抜けると、木が一本も生えていない、茶色い土と石ころだけが広がる場所がある。

そのただっ広い空間は、月の光にまんべんなく照らし出され、まるで泉のように青白い光に満たされていた。

以前はここも森の一幅であった。それをセウラがトウルの訓練の最中に過剰な炎によって大火事にしてしまったので、今では広場となっていた。

「ここが村では有名な、『セウラ広場』である。」

昼間ならばセウラのようなトウラの卵が訓練に精を出していたり、子供達が遊び場所として駆け回ったりしているが、日も暮れたこの時間には、当然誰の姿も見られない。

「ここを一直線に横切っていけば、住宅地に着く。」

シュレは、眠り込んでしまったセウラを背負って、起こさないようになるべくゆっくり広場を歩いていった。

「ん？」

広場の半ばくらいまで歩いたところで、セウラが少し動いた。足を止める。

「起きたの？」

「え、うん……。シュレ、降りるよ。」

「いいよ、そのまま眠っていて。」

未だ疲れの抜けていないその声を聞いて、自分で歩けと言えるほどシュレは残酷にはなれなかった。

「家におくってあげるからさ。ここまで来たら、同じ事だし。」

「ありがとう。ごめん。ほんとは死ぬほど疲れてるんだ。シュレが来てくれなかったら、死んでたかもしれない。でも、どうして、あんな所に……。」

「いつも、剣術の訓練してるんだ。僕は、トウルがつかえないから

ね

「……」

返事は、寝息だった。また、眠ってしまったようだった。

シユレは微笑んで再び歩きはじめた。が、ふと妙な気配を感じて、再び立ち止まった。

森のほうへ振り向いた。

(なんだあれは……)

目を凝らす。何かが、飛んでいた。巨大な翼が羽ばたいている。

「鳥か……？」

そう呟きはしたが、鳥でないことはすぐにわかった。

翼のシルエットこそあったが、それ以外の場所は、人間のそれであつたのだ。

人に翼が生えているとしか思えなかった。

だが、天使などというロマンティックなものとはとても思えない。ひどく禍々しい、あえて言うのなら、悪魔のようなそれ。

シユレは全身に鳥肌が立つのを感じた。

遠くて、目の動きどころか顔すらも判別は出来なかったが、それでも、見られていることだけはわかった。

セウラを地面に下ろして、風よけのマントをその身体にかけた。

「セウラ。少し我慢してて」

腰の剣の柄に手を当て、それがやってくるのを待ちかまえる。

森からやって来たその鳥人は、シユレの眼前に降り立った。

地上に立つと、闇によくなじむ漆黒の翼は、身体の中へと消えた。

「おまえは……」

眠たげな目の奥に、鮮烈な紫色の光を宿した少女だった。

シユレのその顔が、青ざめていく。

「リリ。わたしの名前」

少女は顔を突き出して、シユレの顔を見上げる。

「わたしと同じ、紫色の目をしている。おまえの名前、なんて言う？」

シユレは、答えずに後じさった。

「言ってくれないの。でもたぶん、シユレ」  
「なんだと……!?!?」

シユレは露骨に目をまるめた。

(なぜ、知ってる)

リリは不気味に微笑んだ。

「おどろいてる。やっぱり、さっきのヤツの言ったとおりシユレだ  
つたんだ」

「さっきのヤツだと」

「その目、わたしと同じ」

「だまれ!」

シユレは剣を振り上げる。リリは悲鳴を上げて飛びすさった。

「消え去れ!」

「去らない。わたしはおまえを『もらいに』来たのだから」

「去らないのなら……」

剣を構え踏み込もうとする。が、不意にリリの視線がシユレから  
逸れたのに気がついて、思わず足を止めた。

リリの視線の先を、横目を見た。

(セウラ……)

セウラが立ち上がった。ぼうつとした目で二人に交互に視線  
を送っている。

「シユレ? その人は?」

「ふふ」

リリは微笑と共に左手を振り上げた。

シャー! 耳を刺すような奇声が上がった。リリの腕が、巨大な  
蛇の姿へと変貌したのだ。

蛇は真つ赤な口を開き、鞭のような勢いでセウラへと首を伸ばし  
た!

銀色のキバが、月明かりを浴びてキラリと光る。

「うああ!」

思いがけぬ不意打ちに、セウラは思わず両手で頭を抱えた。

「セウラ！」

シュレは剣を投げ出し、セウラの前に飛び込んだ。

「うぐっ！」

へびのキバは、盾となったシュレの肩口に深々と突き刺さった。

セウラの悲鳴が木霊する。

「だいじょうぶ？ セウラ……」

シュレはセウラの無事を確認すると、安心したように微笑んだ。

「シュ、シュレ！」

リリは眉をひそめて蛇を引っ込めた。支えをなくしたシュレの身体が、崩れ落ちる。

セウラはすかさずその身体を抱き上げた。牙を受けた左肩から鮮血があふれ出している。

身体はひどく痙攣していた。呼吸音もおかしい。

それは、あきらかに出血や痛みから来る苦しみかたではなかった。

「毒……」

セウラは顔を青くした。毒を吸い出そうと傷口に口を当てようと  
するが、

「だめだ」

シュレは身体をねじってそれを拒んだ。

「そんなことしたら、口が腐る」

「で、でも！ シュレが死んじゃう」

「逃げる。きみは、逃げる……」

「バカ！ 逃げられるわけないだろ、死んじゃうよ！」

「シュレを、渡して」

リリが近づいてきて、右手を差し出した。

「おまえ、何者だ！」

「リリ。私の名前」

「どうして、どうして……」

セウラはシュレをいったん地面に置くと、守るようにしてその前

に立った。

「どうしてシュレにこんなひどいことをした！」

「別にシュレにやったつもりはない。おまえにやったつもりだった」

「おまえ……！」

「どいてよ」

リリの右腕が変形した。今度はサソリのはさみのような形となり、セウラにめがけて伸びる！ が、

「熱っ！」

腕がセウラの身体に触れようとしたとたん、リリは呻いて腕を引っ込めた。

セウラの身体の周りに、真っ赤なリップルがたゆたっていた。それが炎の壁へと変質し、リリの手を焼いたのだ。

セウラはものすごい形相で拳を振り上げた。握った拳から、炎があふれ出す。

「殺してやる！」

炎があふれる拳を、殴りつけるようにリリに振り下ろす。

拳を離れた火球が、一直線にほとばしった。

「うあ！」

それはリリの胸に直撃し、小爆発を起こした。身体は吹き飛ばされ、潰れたように地面に落ちる。

気を失ったのか、倒れたままリリは動かなくなった。

だが、セウラの激情は収まりはしなかった。再び拳を振り上げ、猛烈な炎を発生させる。

いつもはどうか制御しようとしていた力を、思い切り解放した。炎は上空高くにまで伸び上がり、広場を真っ赤に照らし出す。

ほとんど炎の柱といってもいい。冗談のように巨大な炎の剣であった。

「死んじまええ！」

それをリリへと、振り下ろそうとした。

「セウラ」

その時、とがめるようにシュレの手がセウラの足をつかんだ。

「やりすぎだよ……」

「なにが！」

血相を変えてセウラは振り返った。

「こいつはシュレを殺そうとしたんだ！ 許せるわけないだろ！」

「でも、だめだ……。セウラ」

つかれた声を精一杯振り絞って、シュレは言った。

「ユリノさんに、いつも言われてるだろ。許可なくトウルを使っちゃだめだって」

「そんなこと言ってる場合か！」

「頼む、やめてくれ……。きみの力はすごいんだ。その力を使えば、人なんて簡単に殺せてしまう。だから、どんなに辛くても、怒りのままに力を振るっちゃいけないんだ。そんなことになれば、悲しむのは、きみなんだから……」

「だけど！」

セウラは納得しなかった。

「でも、それじゃあシュレが！ あいつのせいでシュレが！」

「あいつを殺しても、同じだよ」

「だからって許せないよ！」

セウラの顔は、相変わらず怒りにゆがんでいた。

「安心して、ぼくは、だいじょうぶ、だから……」

怒りをたしなめるかのように、シュレは無理に微笑みを作った。それが、最後の力だった。足をつかむ腕が、落ちた。

### 第三章 (2)

「シユレえ！」

セウラの激情によって作り出された炎は、その顔色が蒼白となると共に、たちまちかき消えた。

青年は動かなくなっていた。

「シユレ、シユレ……」

、あわててシユレを抱き上げた。まだ、微かに息はあった。気を失っただけのようだ。

「バカ。シユレの、バカ！ なにがだいじょうぶなんだ」

セウラはシユレに向かって手をかざした。

リップルをうまく使いこなすことが出来れば、人の身体を癒す光に変えることもできる。

「ルルナみたいに、ルルナみたいに……」

それを呪文のようにつぶやきながら、手に念を集中する。が、

「うあっ！」

つぶやきは悲鳴に変わった。

手からあふれたのは、癒しの光どころか、熱い炎であった。

シユレの身体を焼いてしまいそうになるのを、あわてて手を振ってそれをかき消す。

「くそっ！」

セウラは目に涙をにじませて、何度も地面を殴りつけた。

「なんてへたくそなんだ！ ルルナみたいにどうしてうまくつかえないんだよ！」

その時

「せえちゃん？」

聞き覚えのある声があった。

セウラはさすがのようにして顔を上げた。そこにいたのは、見覚えのある少年の顔だった。

「テイル君？」

だがフリルデの弟は、セウラのことを『せえちゃん』などとは呼ばない。

この村でそう呼ぶのは、一人しかいない。セウラは探した。彼女はすぐに見つかった。

少年の後ろに付き添うように立っていた。

「ルル、ナ？」

絶望に彩られたその表情に、だんだんと気色が戻る。セウラが求めて止まなかった娘であった。

「ルルナあ！ きてくれたんだね！」

飛びつくように立ち上がった。

「え、え？」

状況のまったくわかっていないルルナは、目を『？』にして首を横に傾げる。

「ルルナ！ 得意だったよね！？ 治癒の、解毒のツールを使うの、得意だったよね！？」

「え、得意かどうかは、わからないけど……」

「おねがい！ シュレを助けて、シュレを助けて！」

「え、うん」

ルルナはしゃがみ、言われるがままシュレの肩の傷口に右手を添える。

だんだんとその周囲のリップルが揺れだし、それが白く優しい光に変わっていく。

それに伴って、シュレの苦しげな顔が、若干ではあるが和らいでくる。

「よかった、ほんとに……」

一安心、というほど状況は好転してはいなかったが、セウラの口からは大きな安堵の息が漏れた。

「セ、セウラさん、いったい、これはどうしたんですか？ さっき、すごい火柱が上がったから、駆けてきたんですけど、こんなことに

なつて……」

少年ティルはすっかりおどろいた様子で、落ち着かない目をきよるきよるさせている。

シユレのほうをたまに見ようとすると、血まみれの凄惨な姿は子供心に恐ろしいらしく、なかなか直視できないでいるようだった。

セウラは、疲れた笑みをティルに投げかけた。

「いろいろあつてね。明日じゃ、だめかな。今日は危険だから、早く帰った方がいいよ」

「え、でも」

ティルは頭を掻きながら、言った。

「姉が、まだ帰ってきてないんです。セウラさんは、知りませんか？ 何か、あつたんじゃないかって……」

「フリルデが、帰ってないの？」

「はい」

セウラの顔に、再び不安の色があふれた。

(あのあと、森の奥に走っていったけど、道に迷ったんじゃない……) その時であった。

「うわああ！」

ティルの悲鳴が上がった。不意に背後から何かにつかまれて、身体が持ち上がったのだ。

「ティルくん！」

それは、巨大なサソリの手だった。はさみで、ティルの胸をつかみ上げていた。

リリだった。

爆発の直撃を受けて全身を黒くくすませた少女は、もう一方の手で胸元をさすりながら、恨めしそうな目でセウラのことをにらみつけていた。

「おまえ！ ティルくんを放せ！」

「やだ」

セウラが構えようとすると、リリは背中から漆黒の翼を生やし、

空へと飛び上がった。

「おまえとは戦わない。こわいから」  
「なに……」

リリは森を抜けたところにある、小高い丘を指さした。  
村では、西の丘、といわれている場所だ。

「あそこで待つてる。夜が明けるまでに、シュレを一人で来させる。でないと、この子の首を引きちぎる」

「一人で!? そんなの無理に決まってるだろ! おまえだって、シュレの様態を見ればわかるだろ!」

「そんなこと、知らない」  
「ま、まて!」

リリは聞く耳持たず、翼を大きく広げて丘のほうへと羽ばたいて行ってしまった。

「くそ……くそお!」  
「ちよつ、せえちゃん、どこに行くの!」

セウラが感情的に走り出そうとしたのを見て、ルルナがあわてて声をかける。

「取り戻してくる!」  
「まってよ、せえちゃんが行ったら、ティルくんが首ちぎられちゃう!」

「だからって、シュレを連れて行くわけにはいかな」  
「それは、だめ」

二人のやりとりに、突然女性の声が挟み込まれた。

「セウラ、あなたが考え無しに行動したって、シュレくんは助からないと思うわよ」

いつの間に現れたのか、そこに女性が立っていた。  
丈長のチュニツクの上に、頭部から肩のあたりまでを覆うゆつたりとしたフードをかぶっている。

背中には、大きめのリュックサックが背負われ、腰には短刀が揺れている。

旅人の装いをした、女性だった。

女性は落ち着いた感じのある細い目で二人に微笑みかけると、フードをはずした。

はらりと、短くまとめた金髪が揺れた。旅のためか、少し乱れている。

「ユリノ先輩！」

セウラの目は、こぼれ落ちんばかりに見開かれた。

「帰ってたんですね!？」

セウラは顔をクシャクシャにしてユリノの元に駆けつけると、その胸に顔を埋めた。

「シュレが、シュレが！」

「よしよし」

ユリノと呼ばれた女性は、まるで子供をあやすかのようにセウラの頭を優しくなでる。

セウラはしゃくり上げながらも、今までであったことを口早に説明した。

「リリ……、紫色の目をした、女の子、か……」

ユリノは、噛みしめるように呟いた。

「シュレくんの住んでる小屋がここから一番近いわね。じゃあ、そこでセウラはシュレくんを看病してあげて。ルルナは見張り。結果を張ることを忘れずにね」

「え？ 見張りなら、わたしがやります。ルルナの方が、治療も出来るし」

セウラは反論したが、

「いいのいいの。そんな無粋なこと言わないで」

ユリノの笑い顔に流される。

「じゃあ、わたしはティルくんを助けてくるから。フリルデは、悪いけど後回しね」

そう言い残して、ユリノはまるでお使いにでも行くかのように、西の丘へと向かって行ってしまった。

## ヴァイオレットリップル

二人は少し圧倒されたようにその後ろ姿を見つめていたが、その顔には、若干の安堵の色が増していた。

## 第四章 リリとハスナ

漆黒の翼を羽ばたかせて丘へと向かおうとしていたリリは、変形した自分の手に握られている少年に目を向けた。

気を失って、ぐったりとしている。

（強く握りすぎた。脆い）

困ったように眉をひそめながら、森の上空の一画を通り抜けた時だった。

眼下の一画が、妙に白い色をしていることに気がついた。月の光がそこだけ強く反射しているので、かなり目立った。

「……」

気になって降りてみると、たちまちリリの身体があわだつ。

「なに、これ」

そこだけ、別世界のように寒い。

あたりの木々には、皆、白い霜が降り、場所によっては氷にすっかり覆われてしまっている木もあった。

風が冷やさされ、身体にあたると何かに刺されたかのような、痛みが走る。

（……ハスナ？）

寒さの中心に、首の所まで凍らされたハスナの姿があった。

意識はあるが、身動きできずに声も出せない様子だった。リリを見ると、微かに呻きながら、目を瞬かせる。

「いま、たすける」

リリは思い切り空気を吸い込んだ。そして口をすぼめて、息を吐く。

口から炎が吹き出し、一瞬、氷柱を包み込んだ。その熱により、たちまち氷は溶けて消える。

氷の支えをなくして崩れ落ちそうになるハスナの身体を、リリが支える。

「だいじょうぶ？」

「うう、そうでもありませんね。寒いですが、かじかんだ顔を、ぎこちなく笑わせる。その顔色は悪く、息も荒い。」

「ほんとうに危ないところでした。顔を凍らされる直前にあの娘が気を失ったのでなんとか助かりました。もう少し遅かったら、今頃は氷の中で窒息死でしたよ」

全身から水滴が滴っていく。ハスナはひどく寒そうに、自分の身体を両手で抱いた。

「ん？」

ハスナはリリの黒く汚れた顔を見ると、少し目を鋭くした。

「怪我をしていますね。だいじょうぶですか？」

「だいじょうぶ」

リリは傷を見られるのを恥ずかしながら、顔を背けた。

「心配しないで。だいじょうぶ。セウラとかいうやつに、ちょっとやられただけ」

「そうですね……。きみを怪我させるとはね。わたしも、この娘に殺されかけたわけですし」

苦笑に満ちた目を、意識を失っているフリルデに落とした。

「この村のトゥーラは、ただ者ではないですね。力は未熟なのですが。なんというか、心が強い」

「うん」

「ここからも見えましたよ。ものすごい火柱が上がっていましたね。あなたと戦った相手ですか？」

「うん。たぶん」

リリはそのことについては深くは触れず、サソリの手で握っているテイルを見せた。

「これを人質にした。あとで、シユレが一人で来るはず」

「シユレ？ この娘の言っていた男のことですか？」

「うん。たぶん、あれで間違いないと思う」

「そうですね。なら、人質は多い方がいいですね」

ハスナは背中中のバックからロープを取り出すと、倒れたまま気を失っているフリルデを後ろ手に縛る。

「生きてるの？」

「死んではないはずですよ。ずいぶんと衰弱してはいますが」

「わかった」

リリはテイルを握っていない方の手も、サソリのはさみ状の手へと変化させる。

そして、フリルデを抱き上げたハスナの身体をつかみ、飛び上がった。

## 第四章 (2)

(ここは……)

ひどい寒さに襲われて、フリルデは目を覚ました。

疲れているからか、身体がだるくて動かすことが出来ない。

いや、動かせないのはそれだけが理由ではなかった。後ろ手に縛られ、なおかつ両足も縛られていた。

フリルデは目だけで、周りを見回してみた。

森の中で気を失ったはずなのに、そこにはまばらにしか木が生えておらず、背の低い草が茂っているだけだった。

月が、妙に近いところにあるように感じる。

(どこ?)

頭がぼうつとして、考えがよくまとまらなかった。森ではないどころかに、うつぶせの状態で倒れていることだけはわかった。

首を無理に動かして、もう少し見回してみると、すぐにそれは見つかった。

剣を腰に差した、やせた男の後ろ姿があった。その隣には黒い口ブをまとった少女がいた。

(あいつはわたしがやつつけたはずなのに……。わたしはあいつの背中で眠っていたのか!?)

その背中を射殺さんばかりに、にらみ付ける。

(あたり一帯が黒いリップルに覆われている。結界か。トゥルもつかえない。くそっ!)

せめてもの抵抗に、考えつくばかりの罵倒を浴びせかけてやろうと、口を開きかける。

が、不意にハスナが咳き込みはじめたので、思わず口を閉じた。

「だいじょうぶ? 休んだほうがいい。少し、眠って」

リリが不安そうにハスナの肩に手をかける。

「いや、だいじょうぶです。気にしないで」

「ハスナって、本当に眠らない。眠くないの？ 身体は、大丈夫なの？」

ハスナは小さく笑っただけで、なにも答えなかった。

「それにしても、静かですね」

しばらくの沈黙の後に、ゆったりと口を開く。

「あの日もわたしは、今日のように静かな夜に、咳を響かせていた」

「あの日の夜？」

「ほら、きみといっしょに僕が神殿を出た日の夜です。とても空が綺麗でしたよね。誰一人として、しゃべる人はいなかった。静かで、本当に静かで……」

感慨深げに、空を仰ぐ。

「あのとき、わたしは一つの誓いを立てました」

「誓い？ それは、なに？」

「教えられないな、それだけは」

ハスナはまた、誤魔化すように笑った。

「ねえ、ハスナ。前から思っていた。おまえはどうして、そんなによくしてくれる？」

「記憶をなくして放浪していた無力なあなたを、どうして邪険に扱えましようか」

「でも、わたしは人間じゃない。何者かもわからない、化け物だ」

(化け物？)

フリルデは内心で首を傾げながらも、いつそう聞き耳を立てる。

「そんな悲しいことは言わないでください、リリ。それにきみは化け物なんかではありませんよ。確かに今はまだ人間ではないけれど、わたしにとっては人間などよりも遙かにきみは魅力的です」

「でも、わたしは……」

「それ以上、自分を卑下するようなことは言わないで。もうすぐきみの願いも叶うのだから。あれを手に入れることが出来れば、その力で人間になれるはずだから。記憶も、取り戻せる」

「うん……。でも、もし、わたしが人間になれば、わたしたち、

どうするのかな？」

「そうですね……」

ハスナはすぐには答えなかった。

「もし、よかつたら……」

そう切り出したリリの声は、少し小さい。

せわしなく目を瞬かせて、心なしか顔を赤らめているようにも見える。

「もう旅をするのはやめたいな。どこかに家でも建てて、ゆったりと暮らしたい」

「え？」

リリは、しどろもどろになりながら続ける。

「ええと、あれ。ええと、なんだっけ、二人で、ずっといつしよに住むの。同じ、名前を付けて……」

「同じ名前？ 姓のことかな？ それは、もしかして結婚？」

「そう、かな。けっこん……。けっこんして、いつしよに住みたい」

再び、沈黙が始まった。

「ねえ、だめ？」

答えを急かすように、リリが問いかけた。

ハスナは微笑み返した。

「いいえ。だめじゃありませんよ。ちょっと、驚いてしまっただけ。いかもしれませんね。そうなれば、わたしたちは夫婦だ」

「ふうふ……」

リリはその言葉を初めて聞いたかのように、何度か口の中で繰り返した。

（なにいちやついてるんだか……。まったくうらやましい連中ね）

再び静かになったので、フリルデはゆっくりと息を吐いた。その顔は、ほんのりと赤い。

（なんでわたしが照れてるのかしら）

二人はまだフリルデが目を覚ましたことには気がついていないよ

うだった。

静かに丘から眼下に広がる村を眺めている。

(でも、感化なんてされないわよ。盗賊のくせに)

どうにかして脱出できないものかと、イモムシのように身をよじった。すると、足が柔らかいなにかに触れた。

「!？」

思わず悲鳴があふれそうになるのを飲み込み、足下の方を見る。

暗い上に身体が自由がきかず、ほとんど姿を見ることが出来ない。それでもなんとなく、輪郭だけはわかった。

(子供?)

さらに目を凝らして、首を無理にねじる。すると、なんとか顔が見えた。

見覚えのある顔だった。

「ティール!？」

フリルデは、その少年の名を叫んだ。その顔は紛れもなく、実の弟のそれであったのだ。

「あんたどうしてこんな所にいるの!」

身を乗り出すと、驚きに見開かれた目がいつそう大きくなる。左腕のあたりから、血が出ていたのだ。

「怪我してるじゃない! だいじょうぶ! ねえ、だいじょうぶかって聞いているのよ、ティール!」

その大声に、リリとハスナは当然気がついた。

「静かにしろ」

ハスナが駆け寄ってくる。その後を、ゆっくりリリが付いてきた。

「おまえら!」

フリルデの激情の矛先が、そちらに移る。

「非道! 悪魔! くそ野郎!」

噛みつかんばかりに声を荒げる。ばたばた激しくイモムシ状の体をばたつかせる。

「おまえら! 弟になにをした! 弟までさらってきてなにをする

つもりだ！」

「弟？」

リリが、つぶやいた。

「そうらしいですね」

「そう」

「おまえら……！」

フリルデの目は怒りに燃えていた。のけぞるように首を上げて、わめき散らす。

「死んでもお前らゆるさないからな！ 必ず、ぶっ殺してやる！」

「やかましい娘だな。少し、黙らせてしまおうか……」

ハスナがうんざり顔で、剣を抜いた。

「くそお！」

フリルデはそれに抵抗せんばかりにいっそう身体をばたつかせ、歯を剥いた。

「ちよつとちよつと、やめなさいな、フリルデ」

その時、声が響いてきた。

女の声。だが、リリでもなければ、当然フリルデでもなかった。

「ぶっ殺すとか、くそ野郎とか。女の子がそんな言葉を使っちゃだめだよ。あ、でも、男の子も使っちゃだめかな？ やっぱり」

「何者！」

ハスナは勢いよく声をする方へ剣を構えた。

丘の麓のほうから歩いてきたのは、フード付きの分厚いマントをかぶった、旅の装いの女性。

「ユリノって言いますわ。テイルを迎えに来ました」

細い目を微笑みに染めて、柔らかそうな頬をほころばせ、ひどく楽しそうにして歩いてくる。

「先輩……」

フリルデは身体をのけぞらせたまま、驚きに見開いた目で、ユリノの顔を凝視する。

「フリルデ、セウラたちが心配してたわよ？ あとで探さなきゃい

ヴァイオレットリップル

けないと思ってたけど、手間が省けてよかったわ」

## 第四章 (3)

「おまえじゃない」

ユリノを用心深くにらみ付けながら、リリは不機嫌な声を上げた。

「シユレを連れてこいつて言ったんだ」

「シユレは今、危篤の状態です。動かすわけにはいかないのです、わたしが交渉に來ました」

「交渉、そんなもの……」

「まずは自己紹介をしましょうか」

リリの言葉に、ユリノが声をかぶせる。

「わたしの名前は、ユリノ・ラーズ。一応、この村のトゥーラの中では最年長ですわ。といつても、まだ二十歳をちょっとすぎた程度ですけれど。ちょっと、ちょっとですよ？」

「そんな話は……」

「師匠が亡くなってしまいましたのでね。わたしが、フリルデ達にトゥルを教えております。一応、師匠という立場かも知れませんが、わたしも修行中の身ですから、あまりそう呼んでほしくはありませんね。だから、みんなには今まで通り先輩って呼んでもらうことにしていますわ」

ユリノは片手を胸に当てて、深くお辞儀をする。

「おまえ……」

リリは口を開こうとするが、すぐにユリノの声が被さってくる。

「趣味は、読書。でも、この村にはあまり本がないので、あまり読む機会はありませんわ。出来れば、この大陸の歴史なんかをいろいろと研究したいとも思っているんですけどね。昔は、歴史学者になるのが夢でしたし。でも、師匠が亡くなっていろいろとやらなきやならないことができてしまって、それは、まだまだ、わたしの後輩達が、独り立ちできるくらいになってからになりそうですわ。でも、いつかはするつもりです。何せ、わたしはまだ若いですから。」

二十歳を、ちょっと、本当にちょっとすぎただけですし」

「おい……」

恨めしそうな目をして、一生懸命言葉を割り込ませようとするものの、ユリノはそれを完全に無視してしゃべり続ける。

「それじゃあ、つぎはわたしの得意な料理について……」

「ユリノさんでしたね」

見るに見かねて、ハスナがユリノのしゃべりに声を挟み込んだ。

「訳のわからないことをべらべらと。結界が薄れるまで、時間稼ぎでもしているつもりですか？」

「ばれちゃいました？」

ユリノは子供のように舌を出した。

「いー」

フリルデのびっくりした声が上がった。

ハスナが威嚇するように、足下のフリルデの眼前に剣を突き刺したのだ。

「早くシュレという男を連れてこなければ、この娘を殺しますよ？」

「わかりましたよ……。じゃあ、仕方がないので交渉に入りましようか」

ユリノは若干真剣みを増した目で、リリのほうを見る。

「リリちゃん、でしたね」

「リリに何を吹き込むつもりです」

ハスナがユリノの視線を遮るように二人の間に割って入った。

「わたしはリリちゃんと交渉がしたいのですが」

「だから交渉などするつもりはありません。早くシュレとか言う男を」

「リリちゃん？」

ユリノはハスナが存在などまったく無視するかのようになり、リリに向かつて話しかける。

「結論から言わせてもらおうね。あなた、この村に住んでみない？」

「えー!？」

驚きの声を上げたのは、フリルデだった。

思いがけぬ提案に目を丸くするハスナの足下で、それ以上に大きな目をしてユリノを見上げていた。

「黙ってて、フリルデ」

ユリノは続けた。

「リリちゃん？ あなたの事情は、ある程度は把握しているつもりよ？ この村なら、あなたを受け入れることが出来る。似たような事情なのが、一人いるからね」

「あなたは、何かを知っているようですね」

ハスナは用心深く言った。

「だが、その程度のことならば誰でも言える。自分はおあなたを理解できる。そう言ってるリリのことを利用しようとした者が、いままでどれほどいたことか」

「そうですね。あなたみたいにでしょうか？ ハスナさん」

「なに……？」

ハスナの目が鋭さを増した。が、それは一瞬だった。すぐにその視線はゆるみ、鼻で笑い捨てる。

「反論する余地もないほどにバカげた挑発ですね。それでわたしとリリとの関係が崩れるとでもお思いですか？」

「そのようですね。鎌をかけて見ましたけど、失敗でしたようです。けれど、どうもあなたみたいなお上品な方には、裏があるように思えて仕方がありませんので。ええ、個人的な偏見ですけどね」

ユリノは自嘲するように口元を崩した。

「……」

「とにかくリリちゃん」

ハスナのいぶかしげな視線を横目に受けながら、リリにまた話を振った。

「そろそろやめにしない？ あなたはこのままでは、『すり減っていく』だけだと思うよ？ 幸い、今のところ死者も出ていないし。今ならば、みんなで歓迎もできるわ」

「おい、いい加減にしないと」

やめさせようと口を開いた瞬間だった。

ハスナは絶句した。背後のリリが彼を退けるように前に出てきたのだ。

「その話、ほんとう?」

リリは、恐れるような眼差しでユリノを見上げた。

ユリノは微笑みで返す。

「もちろんよ」

「リリ! あきらめるつもりですか!? 人間になれなくなりますよ!

記憶も戻らなく」

「いいよ」

「なんだと!?!」

ハスナの表情が固まった。

「ねえ、ハスナ。住まわせてもらえるんなら、そうしようよ」

リリの顔がゆるみ始めた。ほんのりと頬を赤らめて、言う。

「な、なあ、それで、けっこん、しようよ。この、村で。記憶なんてどうでもいいよ。わたしは、ハスナがいれば、それでいいよ」

ハスナは激しく首を振った。

「いや、リリ、だまされてはいけませんよ。あなたは純粹すぎます

!」

「でも、あいつはちゃんと住んでた。あのセウラとか言う女は、あ

いつを心から心配してた」

ハスナは目を泳がせる。

「わたしはうそはつかないわ、リリちゃん」

ユリノは手をさしのべた。

「う、うん……」

それに、リリは照れるようにしながらも、手を伸ばした。

もう少しで手が触れる。その時だった

「じょうだんじゃない!」

怒りに満ちたその声が、静けさを取り戻しはじめた丘に響きわた

った。

全員の視線が、一斉にそこに集まる。

フリルデだった。

「誰が、いつしよに住むですって？　じょうだんじゃない！　こいつらが弟になにをしたか、先輩！　わかつているの！」

フリルデは瞳を涙をにじませて、半ばもがくように怒りをぶちまけていた。

「こんなヤツと住んでたまるもんですか！　こいつらは、テイルに怪我をさせたんだ！　ふざけんな！　いいか盗賊ども！　ゆるさないつて言ったよな！　なにが結婚だ！　あんたたちはのたれ死ね！　改心して罪が消えるとも思ってたのか？　ざけんな盗賊！」

「フリルデ、やめなさい！」

「わたしはゆるさない！　いいか！　先輩がゆるしても、わたしはゆるさな　」

「黙りなさいっていつてるでしょフリルデえ！！」

ユリノの金切り声が響いた。

村中に響きわたったのではないかと思えるほどの、耳をつんざくような一声だった。

さすがのフリルデも、動きを止める。

「リリちゃん！」

ユリノは急いでリリに振り向いた。

「……」

だが、すでに遅かった。

リリは、身体を震わせていた。

顔をクシャクシャにして、今にもこぼれ落ちそうになる涙を、こらえていた。

「リリ、ちゃん……」

「リリ、一つ学びましたね。こういう人間たちは、絶対に信じちゃだめなんですよ。悲しい思いをするのは、結局、きみなんだから」  
ハスナの手が、慰めるようにリリの肩にのる。

「この人たちの内心は、フリルデとかいう娘がいったような、ああいうものなのですよ。リリ、きみは純粹だから、すぐに人を信じてしまう」

「……」

リリは震えながらゆっくりと、大きくうなずいた。

「リリちゃん！ そんなことない！ わたしは本当に、あなたのこととを！」

ユリノは声を荒げた。だが、リリが再び顔を上げたとき、その説得は無駄であることを悟った。

その表情。

眉間には深い嫌が刻まれ、歯はむき出しにかみしめられていた。

顔色そのものがどす黒いものになっていき、その興奮に満ちた紫色の瞳が、煮えたぎるような光を放っている。

怒り。

ユリノは反射的に目をそらしてしまった。すさまじく恐ろしいものがそこにあるような気がしたのだ。

「やっぱり、うそだったんだな、女！」

「ちがう！」

ユリノはそれでも必死で弁解しようとした。リリの近くへ駆け寄ろうとしたとき、リリの腕が巨大な蛇へと変わった。

「リリちゃん」

蛇の腕は鞭のようにユリノの胸をひっぱたいた。

その身体はまったく無力に吹き飛ばされ、勢いよく地面にたたきつけられる。

無理をして立ち上がろうとするが、呼吸が止まって身体が動かない。

「なんてこと……リリちゃん……」

唯一自由のきく目が、その姿を見た。

リリ。そう呼ばれていた少女の身体は、みるみるうちに、見たこともない生き物へと変化していった。

身体は膨張し、両腕は巨大な蛇になった。

背中からは漆黒の翼が飛び出し、両足は鋭いかぎ爪を生やした鳥の足へと変化していく。

鱗の覆うしつぽが生え、全身を銀色の長い毛が覆い尽くす。

頭からは一本、二本……、全部で五本の角が生える。

唯一、顔の部分だけは、その形をかるうじて留めていたが、いつそう生え出た髪が、顔の大部分を覆い尽くしていた。

その髪の間から、紫色の目が不気味な光を放つ。

獣のような彷徨を上げると、蛇の手をハスナに巻き付け、漆黒の翼を大きく広げた。

ユリノはぼやけた視界の中に、リリの蛇の腕にいだかれたハスナの顔を一瞬、見た。

笑み。勝ち誇ったような、嫌らしい薄ら笑い。

それはとてつもなく醜く汚いものに、ユリノには見えた。

「気がついて、リリちゃん……。あいつは、いけない」

もつろつとする意識の中、ユリノは最後にそう呟いた。

## 第五章 リップルの雫

### 第五章 リップルの雫

「どご……どご、だ……」

獣へと姿を変えたリリは、上空から紫色の目を光らせ、地上を凝視していた。

「リリ、焦らないで」

リリの蛇の手に抱かれたハスナは、リリに向かって穏やかに笑いかける。

「わかってる」

そう口では言ったが、リリは相当焦っている様子だった。

しばらく村の上空を旋回した後、突如その紫色の目が凜と光った。

「見つけた。あそこに、わたしと同じ力が……」

見下ろすのは、森の入り口の近くにある、掘っ立て小屋だった。

「あれ、か」

ハスナは顔をしかめながら言った。興奮しているのだろう、リリが身体を強く締め付けすぎている。

「もう少しだね、リリ。きみの記憶も、願いも」

リリは勢いよく下降した。滑空して、地上に降りようとした、その瞬間。

カ！ と、周囲が明るくなった。光と同時に吹き上がった風が、唸るような音を上げる。

光を帯びた風が、まるで刃のように鋭さを増して、リリの身体に襲いかかってきた。

「うおお！」

ハスナの悲鳴が響いた。リリが体勢を崩し、ハスナを手放してしまったのだ。

かなり地上に近づいていたのでそれほど高所から落ちたわけでは

なかったが、ハスナは全身を地面にたたきつけられた。

「ハスナ！」

リリはハスナの元へと降りようとするが、すかさず無数の光の刃が襲ってきた。

全身を切り裂かれ、鮮血が空中に激しく四散する。

「くう！」

苦痛に悶えながらも、リリは傍らにある巨木の陰に、何かを見つけた。

口を大きく開いた。火球が巨木にめがけて吐き出される。

火球が巨木に直撃するその瞬間、一人の小柄な娘が飛び出した。

「行かせない！」

大きい目をきりりと光らせて、背後の小屋を守るように立ちほだかった。

ルルナだった。

「邪魔あ！」

すかさずリリはルルナに突進した。

ルルナは両手を大きく広げ、叫んだ。

「《光の幻刃<sup>げんじん</sup>》！」

ヒュウウウ！ 猛烈な風切り音を響かせて、光る風が渦を巻く。

周辺一帯が昼間よりもまぶしい光に満ちあふれていく。

光は数えきれぬほどの刃へと変わり、リリに襲いかかった。堅い体毛に覆われたその身体が、派手に切り裂かれる。

リリは唸った。紫色の目が、ルルナをにらむ。

「どけえ！」

鮮血をまき散らせながら、無理に蛇の腕をルルナに繰り出した！

「やだ！」

ルルナはへびの腕めがけて手をかざした。無数の光の刃は、繰り出されたへびの腕の周りに取り巻き、集中的に切り裂きまくる。

リリは悲鳴を上げ、腕を引いた。

「まだあ！」

ルルナは、万歳するかのように両手を大きく広げた。数え切れないほどの光の刃が、くるくる勢いよく回転しながら、ルルナの体を中心に放射状に広がりはじめた。

「《幻刃の監獄》！」

ルルナのその声に呼応して、一斉に光の刃が渦巻いた。リリの絶叫が響きわたった。

光の刃の渦が、檻のようにリリを取り込み、激しく彼女を切り裂いたのだ。

その眩いばかりの光の中に、真っ赤な鮮血が弾けとぶ。

「ここで、ぜつたいに、守らなきゃ……」

額の汗がしたたり落ちる。

ルルナの白く透き通っていた肌が、どす黒く変わっていく。

身の丈に合わないトウルを繰り出し、体力が猛烈な勢いでそぎ落とされているのだ。

それでも白い歯をかみしめて、ルルナは耐えた。

「凝縮！」

両手を下ろし、胸の前に持っていく。

光の刃の檻を象徴するかのような風に包まれた光の玉が、胸前あたりに出来上がった。

ルルナはそれを、両手で押しつぶしていく。

光の玉が小さくなるのに呼応して、リリを取り巻く光の刃の檻も凝縮されていく。

リリの身体はいつそう切り裂かれ、同時に圧力によって半ば無理矢理小さくなる。

狂気のような悲鳴が上がる。だが、それすらも風音にかき消される。

「これを受ければ、どんなものも、潰れて、消える。あなたも……」

「……………」

森の入り口の近くにある小屋の中の寝台で、シユレは眠っている。その傍らのイスにセウラは座っていた。

耳が痛くなるほどの風の音が響きわたっている。まぶしい光が、ちかちかと窓の外から入り込んでくる。

風に煽られて、窓が今にも割れそうなほどにガタガタ震えている。部屋の端に置かれたランタンの灯火は身をねじり、粗末な小屋は、今にも崩壊しそうなほどに唸り、揺れている。

ルルナが、戦っている。

彼女は結界を張り、万が一あるかも知れない襲撃を待ちかまえていた。

ルルナ。セウラはもちろん、フリルデよりもトウルの腕は上だった。

生真面目で飲み込みの早いルルナは、教えられたあらゆるトウルを、セウラやフリルデに先んじて使いこなせるようになっていた。

だが、穏やかなルルナに、戦いほど似合わないものはなかった。

(助けに……)

行ってあげたい。その気持ちはあったが、今はここを動きたくないという気持ちも強かった。

シユレの寝顔にはすでに苦悶の色はなく、穏やかだ。

穏やかすぎるといつてもいい。

峠を越えたと言うよりは、苦痛に呻く力すら失ってしまったかのような、そんなふうにはセウラには思えた。

微かに息はある。心臓も、動いている。それが、彼の『生』を示してはいた。

だが、ぴくりとも動かぬその安らかすぎる寝顔が、セウラには恐かった。

今、この瞬間にフツと呼吸が止まってしまおうのではないか。

そう思うと、大声を上げて泣き叫びたくなる。実もふたもなく抱きしめたくなる。

むろん、そんなことは出来るはずもなく、淡々と額に当てた布の

水を取り替えてやることしか、今のセウラにはなにもすることがない。

セウラはこの短い時間ですっかり憔悴しきり、目もうつろにシュレの寝顔をひたすら見守り続けていた。

「……………」

激しい風音や小屋の揺らぎに促されたのか、不意にシュレは目を開いた。

「起きたんだね。気持ち悪くない？」

セウラは穏やかに微笑んだ。

起きてくれたら、泣いてしまうのではないか。

ずっとそう思っていたが、意外と落ち着けていた。

「うん……………」

シュレはセウラと目を合わそうとはしなかった。

持ち上げた自分の手のひらを、考え込むように見つめている。

「風の音がすごいね。外で戦っているのはルルナと、リリ？」

セウラは頷いた。

「リリか……………」

「知り合い、なの？」

セウラは恐る恐る、聞いた。

「あの子は……………」

シュレは、ゆっくりと言った。

「ぼくと、同じなんだ」

「同じ？」

それから先、なかなかシュレの口から言葉は出てこなかった。

「よくわからないけど……………。言いたくないなら、言わなくてもいいよ？」

セウラは無理をして、笑った。

言わなくてもいい。口ではそう言ったが、本当の気持ちは『言わないで欲しい』だった。

シュレが何者なのか。そんなことは知りたくなかった。

シユレとこの村でいつしよに住んでいられるという『今』があるだけで、十分だった。

余計なことを知って、『今』が壊れてしまうのが、何よりも怖い。全てを知ることには、一体何の価値があるのか。知らないまま、うやむやなままだって、幸せであることが一番じゃないのか。

「ねえ、もう休んで、シユレ」

だがシユレは悲しそうに、首を振った。

「言うよ。いつまでも、隠し通せることでもないから。いずれ、わかってしまうことだから」

「い、いいよ！」

セウラは思い切り首を横に振った。

「い、いいから休んで！ いわな」

「人間、じゃないんだ」

強引に、シユレはセウラの言葉に声を被せた。

「……え？」

その言葉は、あまりにも不意打ちだった。なにを言っているのか、理解できなかった。

「僕たちは、『雫』。リップルの落とした、一滴の、『雫』……」

シユレはセウラと目を合わそうとはしなかった。天井を見上げたまま、続ける。

「天空にたゆたうリップルは、ごくまれに、数百年に一回あるかないかの割合で固まり、『雫』を落とす。それは『リップルの雫』と呼ばれ、高価な宝石として、またはトゥルの源として、法外な値段で取引される……」

「それは、知ってる。聞いたことある。けど、昔話でしょ。確か、グーマとか言う魔王がすべてを独占して、彼が倒されたとき、全部失われたって」

「彼は……」

「彼？」

シユレは身を起こして、窓の方に視線を移す。

紫色の瞳で遠くのなにかを見つめながら、独り言のように言った。  
「彼、ロシア国の王グーマは、自らの邪念を八つの《雫》に詰め、  
八人の下僕を作り出した。《ミレス》と呼ばれた彼の忠実な八人の  
下僕は、各国を侵略。そして世界を統一し、グーマは魔王として君  
臨した」

「シユレ、それがいい……」

シユレが話しているのは、この大陸に住まっている者ならば誰でも  
も知っている昔話だった。

ひどく落ち着いた様子で、淡々と言葉を紡ぐ。

「グーマは十年の治世の後に、新興の小国カリリンクの若き戦士達に  
打倒された。だが、八人の《ミレス》は死ななかった。というより  
も、彼らは生き物ではなかった。あくまでも《雫》が放つリップル  
によって作られた、かりそめの生物。それを殺す方法は一つしかない。  
《雫》から、すべてのリップルを放出させること。だけど、そ  
れには膨大な時間がかかる。そこで、神の山と呼ばれるアルエス山  
に封印にされることになった」

「封印……」

「その封印も、千年の後にある者によってとかれてしまう。《ミレ  
ス》たちは再び世界に散らばった。長い封印の末に力を失い、記憶  
すらもなくした彼らは、時には獣に、時には人に姿を  
変えて世界を放浪した。リリの場合は、獣と人間の混じった姿だっ  
た。おそらく消耗が激しすぎて、獣にも人間にも、形がうまくまと  
められなかったんだと思う。僕の場合は」

「僕のばあい！」

セウラの悲鳴のような声が、言葉を遮った。

血走った目で身を乗り出し、シユレの肩を揺さぶった。

「なにを言おうとしているの!? シユレ! シユレは、どう見た  
って人間じゃないか。何一つ変わったところなんてないじゃないか。  
おかしいこと言わないよね! 変なこと、言わないよね! ねえ、  
いい」

セウラは言葉をつまらせた。シュレが、その身体を抱きしめたのだ。

「セウラ、ごめん」

耳元で、ささやくように言う。

「ぼくは魔王によって作り出した《ミレス》。そしてその元は、リップルの《雫》。人間じゃないんだ。この姿は、偽りの姿。ずっと、隠してた。ごめん。知られることが、怖かったんだ。君に嫌われると思って。本当に、ごめん……」

「ウソだ……」

セウラは震える唇で、表情もなくつぶやいた。

「リリは、おそらく僕の力を奪いに来たんだ。彼女は相当消耗しているみたいだから」

その時、シュレの身体から紫色の光があふれた。

目が痛いほどの鋭く強い光だった。

とても目を開けていられず、セウラは目を閉じた。目をつむっても、まだまぶしい。

セウラを抱きしめるシュレの腕がゆるんだ。

「どうしたの？ どこにいるの？」

セウラは右手で目を守りながら、左手でシュレの方を探る。だが、シュレに触れることが出来なかった。

「彼女は、《ミレス》のうちの一人。本当の名は、リリダロス。消耗しているとはいえ、未だにその力は、相当なはず」

声だけが、聞こえてくる。

「僕の本当の名は、シュレルダ。この村の前で倒れていた僕を、きみは助けてくれた。きみのおかげで、僕は力を取り戻すことが出来た。記憶も、取り戻すことが出来た。そしてきみは、僕に幸せをくれた」

「な、なにを言っているの？ シュレ！」

「力を、貸してあげる。みんなを守ってあげて」

「それは、どういふこと……」

光が、消えた。

「シュレ？」

ぼんやりする目を何度も瞬かせながらシュレの姿を探すが、今までいたはずのベッドの上には、その姿はなかった。

「シュレ……」

その代わりに、紫色の光を放つ小さな宝石が、一つ。

まだシュレのぬくもりの残るシーツの上に、転がっていた。

## 第六章 変貌

### 第六章 変貌

ルルナは戦っていた。

額から止めどなく流れ落ちていく汗を、顔を振ってはじき飛ばす。光の刃の牢獄は、すでに作り出された当初の半分近くにまで小さくなっている。

リリの悲鳴が響きわたり、それすらもかき消す激しい風切り音が狂ったように唸りを上げる。

《幻刃の監獄》。それは光の刃で作られた檻の中へ敵を閉じこめ、動けなくした上で切り刻み、押しつぶす。

数多いトウルの中でも高等の範疇に入るものであり、ルルナの使える最強のトウルだった。

人を、生き物を、傷つけることなどしたいとも思わない。こんな残酷なトウルなど、今日まで知っていることすら不快だった。

嫌がるルルナに無理矢理訓練を課し、覚えさせたのは、ユリノだった。

師匠が病で命を落とした次の日からだ。訓練が始まったのは。

父代わりでもあった師匠を亡くした悲しみがまだまだ生々しく、文字通り涙が乾いてすらいないルルナを、ユリノは無理矢理森へ連れ出して、訓練を課した。

訓練のためにオオカミを殺したときには、涙が止まらなかった。目をつむると、切り刻まれた狼の死体が克明に現れ、数日眠ることも出来なかった。

ようやく光の刃を自由に操れるようになり、一応の基礎訓練が終了したときは、本当にうれしかった。

もう二度と使うものかと心に決めていた。村は平和だったし、役に立つ日が来るとも思っていなかった。

それが、役に立つ時が来た。使うことに躊躇もなかった。

シュレやセウラ、村人達を守らなければいけないという気持ちで、強く背中を押してくれていた。

当時はユリノを本気で憎みそうになったが、今では、感謝の気持ちしかない。

(とどめ！)

ルルナは、大きく息を吸った。

檻の象徴でもある眼前の光の玉を、一気に潰そうと両手に力を込めた。

だが、動かない。

ある程度まで両手は近づいていたが、もう少しで合わさろうというところで、そこから先に進まない。

絞り出されるように、汗と共に涙まであふれてくる。

リリの彷徨が響くと共に、徐々に光の玉は大きくなっていく。

押し返されているのだ。

負けられない。ルルナも全霊を込め、力を注ぎ込もうとした。

「そこ、までだ」

その時、首筋に冷たいものが触れた。

ハスナであった。

額から流れる血をぬぐおうともせずに、抜き身の剣をルルナの首筋に当てていた。

「そのトウルを、やめろ」

剣を持つ手が、震えている。

リリの手から落ちたときの衝撃で、相当な痛手を受けているはずだった。気を失っているものだとばかり、思っていた。

「やめない」

ルルナは首筋に当てられた剣などないかのように、ハスナの方を見もせず言った。

「わたしは、せえちゃんを、シュレくんを。この村を守らなきゃいけないから……」

「きさま！」

だが、口では強がっていたが、ルルナの力は限界に達していた。ただではなく、一瞬でも気が散ってしまったことが、ルルナとリリの力の拮抗を崩していた。

光の刃が弾かれ、リリの体が元の大きさに戻っていく。

「絶体に、やめない！」

力をどうにか込めるが、がんばりも虚しかった。彼女の必死は、まったく無駄な行為に終わった。

光の檻は完全に破壊されていた。

風の音は弱まり、怒り狂った彷徨はいっそう高く響きわたった。

リリは檻から脱出すると翼を広げ、鮮血を振りまきながらルルナに突進する。

「せえちゃん」

ルルナは色をなくした。逃げる力など残っているはずもない。

「ごめん」

観念したように、目を閉じた……。

「ルルナあ！」

その時だった。セウラの声が響いた。突如吹き付けてきた風が、ルルナの身体を包み込む。

「え……！？」

目を開くと、広場が眼下に広がっていた。ルルナの身体は、上空にあった。

空を飛んできたセウラが、ルルナを掠ったのだ。

「飛んでる……」

信じられないとばかりに舌を振るわせながら、呟く。

「飛んでるよ、せえちゃん」

「うん」

セウラは頷いただけだった。

身体の周りを取り巻くリップルを上手く操ることによって、空を飛ぶトウルは存在する。

だがそれは極めて高等、至難なツールであり、セウラ達はもちろ  
ん、ユリノも、師匠ですら使いこなすことは出来ていなかった。  
そのトウルを、今のセウラはあたりまえのように使いこなしてい  
た。

「おまええ！」

不意のセウラの登場にも、リリはひるまなかった。

蛇の腕が柔軟に方向を変えて、上空のセウラのほうへと迫ってく  
る。

「……………」

セウラはタイミングよく片手を突き出した。口を開けて襲いかか  
る蛇の下あごをつかみ、思い切りぶん投げる！

砂埃を上げて地面にたたきつけられるリリを横目に、セウラは地  
面に降り立った。

「せえちゃん、それは……………？」

ルルナの視線が、セウラの左手に握られているものに留まった。  
紫色に輝く宝石だった。

「……………」

セウラは、答えなかった。

「それ……………、それだ！」

リリの声が響いた。

獣の姿のまま身を起こしたりリリは、紫色の目を爛々と光らせて、  
セウラの左手に握られたそれを凝視していた。

リリの右手の蛇が、大きく顔を持ち上げ、鎌首をもたげる。威嚇  
するかのように甲高い唸り声を上げる。

「それを、わたせえ！」

「渡すもんか……………」

セウラは、《雫》を力強く握りしめた。

周りの空間が震え、ゆがみだす。《雫》から発生したリップルが、

激しく波打ち始めたのだ。

「今のわたしは、とても強いんだ。おまえに勝ち目はないよ。あきらめて、どっかにいなくなれ」

右手の拳をリリに向かって突き出すと、激しい音を立てて炎が吹き上がる。

「でないよ、燃やすぞ！」

「わたせえ！」

威嚇もリリにはまったく関係がなかった。大きく目を剥き、口から火球をセウラに放つ。

「無駄！」

セウラは右手の拳を振り上げ、リリの放ったその数倍はあろう巨大な火球を投げつける。

リリの火球はかんたんにそれに飲み込まれた。

「なあ！」

なおかつ火球の勢いは止まることなく、リリの身体に炸裂した。爆発。

周辺一帯が真っ赤な光に染まり、村を揺るがすほどの爆音が響きわたった。

地面が爆風に煽られ、漆黒の空に土埃がもつもつと舞い上がる。

(これは……)

上空に吹き飛ばされた土や石ころがぱらぱら落下してくる中、セウラは息をのんだ。

焦りに満ちた目で、自分の手のひらを見つめる。

(やりすぎた)

元々、トウルを使う際の力の加減が苦手だったセウラである。

にもかかわらず、《雫》を手に入れたことにより、今のセウラは《雫》より発散されるリップルをその体に宿していた。

その威力は通常考えられないものだった。

少しでも力の加減を誤れば、第二の《セウラ広場》が出来上がる程度では済まないだろう。

おそらく村全体が、灰になる。

リリは爆発によって放射状にえぐられた地面の中央に、半ば身体  
の埋まった状態で倒れていた。

「すごいよ、せえちゃん……」

傍らのルルナがあっけにとられた様子で、呟いた。

「わたしの結界の、中なのに……」

「ルルナ」

セウラはリリを見定めたまま、口を開いた。

「危険だからどこかに避難してて。ここにいると巻き込まれる」

小さく頷いて遠ざかっていくルルナを横目に、その生死を確認す  
るためにリリに近づく。

ぼろぼろに焼けたリリの身体は、もはや戦える様子ではなかった。  
翼は破け、五本の角のうち、三本がへし折れている。

身体はしぼみ、半ば少女の姿へと戻っているが、片手は蛇の形、

片足は鳥の足のままだった。

フサフサの体毛も、焦げた状態で全身を覆ったままだ。

もはや獣の身体をまともに維持することができないのだろう。ひ  
どく不安定な姿だった。

「く、くそお……」

だが、目に宿る強い光だけは衰えてはいなかった。

むき出しの歯をかみしめて、憎々しげに顔を歪めながら、セウラ  
の身体をにらみ付けた。

「わたしは、手に入れる」

「渡さない」

セウラは、きっぱりと言い放った。

「どんな理由があっても。渡さない。消える。二度とシユレには近  
づくな」

「いやだ……。いやだあ！」

ボロ、ボロと、リリの目から涙があふれ出した。

「せっかく、見つけたのに、あきらめてたまるもんかあ！」

だだっ子のように顔をクシャクシャにして、セウラに向かって足を踏み出そうとする。が、

「リリ。もうやめて」

ハスナの背中が、それを拒んだ。彼がセウラとリリの間立ちに立ちはだかったのだ。

リリはあわてて涙をぬぐう。

「ハスナ、危険。どこかへ行っていて。あいつはわたしが……」

「無理でしょう。見ていればわかりますよ」

(こいつ……)

セウラはゾツと鳥肌を立てて、思わず後じさった。

ハスナの表情。背中側のリリに見えなかったのは、幸いだったのかも知れない。

笑っていた。

本当にうれしそうに。こみ上げるものが我慢できないとばかりに、その顔には満面の笑みが張り付いていた。

「なんだ、おまえ。なんなんだ……」

ひどく陰湿。恐ろしく邪悪。

どうして相方が死の危機に瀕しているというのに、このようなうれしそうな笑みを浮かべることが出来るのか。

リリがどれだけ必至に戦っていたと思うのか。

敵であるというのに、ひどくリリが哀れに思えた。

「消え去れ！ でないと、殺すぞ！」

あの顔はもう見たくない。目を背け、ゴミを払い捨てるかのようにな、セウラは腕を振った。

「なにをそんなに怒っているのです」

ハスナはセウラの途惑いを楽しむように気味の悪い笑みを浮かべながら、言った。

「まさかとは思いますが。あなた、リリに同情しているのですか？ わたしが、心配するそぶりを見せないから」

「……」

「それは無理というものです。わたしには、出来ません」  
「ハスナ……？」

倒れたまま、さすがのようにリリは見上げた。

ハスナは振り向くと、極めて穏やかにリリに微笑みかける。

「リリダロス。残念です。あなたもそろそろ終わりですね」

「リリ……ダロス？」

リリははじめてその名を聞いたのかも知れない。目を泳がせながら、その名を繰り返した。

「あなたの、本当の名ですよ」

「本当の？ どういうこと。いつしよにわたしの記憶を探してくれていたハスナが、どうしてわたしの本当の名前を……」

「知らない者など、いませんよ」

ハスナはゆっくりと剣を振り上げた。セウラは反射的に構えたが、彼の剣は、セウラには向かなかった。

ハッとした。

「やめろお！」

手を伸ばして叫んだが、遅かった。

ハスナは剣を素早く逆手に持ち替え、リリの身体に突き刺した！  
「あ、あ……」

胸に深々と突き刺さった剣を引き抜くと、傷口から紫色をした光がこぼれる。

「おや？ 血を作り出すだけの力も、もはや残っていませんか」

「は、ハスナ……」

リリは表情もなく、崩れ落ちた。

微かにひくつく身体から、まるで空気が抜けていくかのように紫色の光があふれ出していく。

「いい機会ですから、教えてあげまじょうか。あなたの知りたがっていた過去を」

苦悶するリリに、ハスナの侮辱に満ちた笑みが降りかかる。

「あなたは、グーマが自らの邪悪を《雲》に込めて作り出された《

ミレス》のうちの一人、リリダロス。八人の中でも群を抜いて残虐卑劣。魔王の大陸統一の際には、最も多くの人間を殺した《禍き娘まが》

「ミレ、ス……」

「魔王グーマの死後にあなたは封印されたのですが、長い歳月の後に封印を解かれ、力と記憶をなくしてこの世界に放浪することになったのですよ。そして、あなたはわたしに偶然出会った」

「……」

リリは何かを言いたそうだったが、もはや口を開く気力も残っていないようだった。

ぼんやりと自分を裏切った男のことを見上げている。

「どうして教えなかったかとても、聞きたいのですか？」

ハスナは大きく口元をゆるめた。

「だって怖いじゃないですかあ。あなたは《禍き娘》と呼ばれたほかに、人の命を何とも思わないヤツだったんですからね。過去を覚えて記憶を取り戻されでもしたら、わたしは殺されてしまうかもしれないですよ？ それに人間になりたいなどと、叶わぬ夢を吹き込むことも出来なくなる」

「か……叶わぬ……？」

「本当に、獣程度の知能しかないのですね。あなたはリップルから落ちた《雫》。石ころなんですよ！ そんなものがどうやって人間になるんですか。子供でもわかることですよ」

「じゃ、じゃあ」

リリはそれでもハスナを見上げた。

「け、けっくんは……」

それが、リリの最後の言葉だった。

紫色の目からひとしずくの涙がこぼれ落ちると、彼女の身体は一瞬大きな光を放った。

その光が消えたとき、あとには灰色に色あせた《雫》が転がっていた。

ヴァイオレットリップル

「まあ、その約束は守るつもりですがね」  
ハスナはおもむろに、それを拾い上げる。  
「これで、ふたりは永遠に一緒ですから」  
笑い声が、響いた。

## 第六章 (2)

「おまえ……、なんだ」

セウラは呆然と、呟いた。

「その子は、おまえのことを信じてたんじゃないのか？ いっしょに旅をしてきたんじゃないのか？ なんてそんなひどいことが出来るんだよ」

「あなたに、そのようなことを言われる筋合いはありませんが」

ハスナは肩をすくめた。

「もつとも、その気持ちはわからないでもありませんがね。あなたのような感情的な人間は、このような石つころにすら情を込めることが出来るんでしょうから」

「いっしょころだと……。ちゃんとした心を持っていた！」

「石つころですよ」

「ちがう！ 人間だ。そいつも、シュレも、わたしたちと同じ、人間だ！」

「おやおや」

ハスナは自分のこめかみの辺りを、指先で叩いた。

「だいぶ、やられてしまっているみたいですね。彼らの支配方法の一つに、そういうのがあるんですよ。《雫》の輝きで人間を魅了することで、その人間の心を自由に操るといふ方法がね」

「わたしは、支配なんかされてない！」

「支配された者は、誰もが大抵そう言う」

「おまえ……！」

セウラは顔を真っ赤にして歯をきしませる。

「むろん、わたしは支配などされなかった。あの獣娘の偽りの心にも、わたしは心を動かされなかった。なぜだかわかりますか？」

言いながら、ハスナはリリの《雫》を額に押し当てた。

「それは、わたしが強い人間だからです。どのような誘惑にも負け

ぬ、屈強な精神を持っているからです。だが、身体の方はそうではなかった。わたしほど脆弱な人間はいないと断言できるくらいに、身体の弱い人間でしたよ、わたしはね。二十歳までは生きられないと言われていたこともありまして」

額に押し当てる手が震えている、ものすごい力がこもっているようだった。

「気だるさを押し殺し、まずい薬を飲み続け、神殿にこもって当てもならない神に祈り続けていた日々……。地獄でしたね、まったく！」

感慨深げに空を見上げる。

「いつそ死んでしまおう。そう決心し、夜、一人で神殿を抜け出したあの夜。たまたまりりがわたしの前を通りかかった。わたしには、あの小汚い娘が天使に見えましたよ。目を見て彼女が《ミレス》であることはすぐにわかりましたのでね。生きるしるべを得るためにリップルに関するあらゆる書物を、読みあさっていたので」

額に《雫》押し当てる力が、いつそうこもる。次第に額の皮膚が破れ、ぼたぼたと血が顔面にしたたり落ちていく。

「な、なにをやってるんだ……」

ハスナの血にまみれた口元を、ぺろりとなめた。

「宝石を持っていれば、いつか支配されてしまうでしょう。そうされない方法はただ一つ、逆に支配する事」

額からさらに血があふれた。

(いけない！)

セウラは思った。腕を振り上げ、念を込める。リップルが見る頭上に集まっていき、巨大な火球を作り上げる。

「力は使わせない！」

腕を振り下ろすと、轟音を上げて火球はハスナに向かって飛び込んだ。

リリを倒した時のそれすらも凌駕する巨大な火球は、真っ赤な光を上げて、ドーム状に爆裂する！

地面が揺れる。

熱風が吹き上がり、周辺一帯の視界は、猛烈な土埃によって覆い尽くされる。

(やつつけたか……?)

上空へ退避したセウラは、それを見下ろした。

しばらくの後、土埃が晴れると、先ほどリリを埋めた放射状の穴を覆い隠すかのように、さらに巨大な穴がそこに出来上がっていた。

「なっ……!!」

だがその中心を見て、セウラは愕然とした。

ハスナは立っていた。

いや、ハスナであった者が立っていた、という方が正しいだろう。その姿は、まったくちがう者へと変貌していた。

背中に漆黒の翼が揺れていた。頭部からは三本の角が伸びていた。銀色に光る髪が背中に流れ、むき出しになった身体には、鉄のような筋肉がひしめいている。

両手、両足の先からは銀色の爪が伸び、腰から下は、髪と同じように銀色に輝くフサフサの体毛が足の根本にまで覆っている。

そしてその額には灰色の《雫》が、埋め込まれていた。

「リリ……」

変貌したハスナのその姿を見て、セウラはそうつぶやいた。

それは確かに、先ほどのリリの姿になんとなく似ていた。

だがリリの、獣が無理矢理合わさったような不定型なそれとは、まったく違っている。

ハスナのそれは、異様でこそあったが、極めて美しく整っていた。

「神話に出てくる半人半獣の強き神ガージをイメージしたのだが、どうですかね」

鋭いキバののぞく口から、丁寧な言葉使いが放たれた。

「素晴らしいでしょう。こうしてわたしが力を使えば、このように美しく、なおかつ完璧な姿となれるのです。残りカスでしかないこの《雫》の力でさえも、身体に取り込めばこれくらいの力にはなる

のですから」

その視線が、セウラの手の持たれた《雫》に向けられる。

「楽しみですね。それを手に入れれば、残りの《ミレス》でさえも、わたしに歯向かうことはできなくなるはずですよ。そしてわたしはいずれすべての《雫》を手に入れ、永遠に続く命を手に入れる。それこそが、わたしがあの静かな夜に立てた誓い」

「永遠の命……」

そのセウラの反応に、ハスナは満足そうにうなずいた。

「そうです。それが、わたしの望み。脆弱な身体に生まれついたわたしは、ずっと死の影につきまとわれて生きてきた。健康なあなたにはわからないでしょう？ 明日、もしかしたら目を覚まさないかも知れない。そんなふうに怯えながら、夜、目をつむらなければならぬ苦惱は！」

「……」

「いまではある程度健康になった。だが、やはり怖い。夜が怖い。闇が怖い。眠るのが怖い！ 一度染みついた恐怖はそう簡単には消え去らない。その苦惱を完全に払拭するには、死なぬ身体を手に入れるしかないのですよ。これが、わたしが健康に生きる唯一の道。ぐっすり眠るための最良の手段！」

「ぐっすりって……。そ、そんなことのために、おまえは……」

「そんなこと、だと？」

ハスナの目が鋭くなる。彼を取り巻くリップルが、威嚇するようにうごめきはじめる。

「……まあいいでしょう。別段理解してもらおうとも思いませんよ。健康に育った人間などにはね！」

瞬間、セウラにはハスナの身体が数倍に巨大化したかのように見えた。

巨大な漆黒の翼を広げたのだ。

猛烈な突風が吹き上がった。弾かれた土が目に入りそうになり、セウラは思わず目をつむってしまった。

それが油断になった。

ハスナの速さは尋常ではなかった。目を開けると、すでに眼前にまでその姿は迫っていた。

腕をつかまれる。

「遅いなあ！」

ハスナはセウラを上空へと投げ飛ばし、それに向かって口から火球をはき出した。

「くっ！ 《紅き障壁》！」

セウラは無理な姿勢のままに炎の壁を作り出した。火球はそれにぶつかり、爆音を響かせる。

防いだ。が、爆発が起こす衝撃までは抑えきれない。勢いを受けて、身体はいっそう上へと押し上げられる。

「ふはははあ！」

笑い声と共に、その身体をハスナの悪魔のような影が覆った。

「うわあ！」

セウラは破れかぶれに火球を放ったが、簡単にかわされる。

次の瞬間にセウラの目に映ったのは、口を開いたハスナの顔であった。

至近距離から、ハスナは火球を吐いた。火球は《紅き障壁》を貫いて、セウラの胸で爆発した。

「……………」

胸が圧迫されて、悲鳴すら上がらない。

セウラは無理に体制を整えつつ、飛ばされた勢いを利用して間合いを取ろうと逃げる。

「さっきの氷の娘といい、この村のトゥーラはよく逃げるなあ！  
一体どこへ逃げるつもりだあ？ また罨でもしかけてあるのかあ？」

わけのわからないことをまくし立てながら、ハスナは翼を広げてぴたりとくっついてくる。

むろん罨などあるわけもない。

胸を押さえる。息が苦しい。火球を胸に受けたときの衝撃で、セ

ウラは呼吸をおかしくしていた。

追いかけてくる悪魔にがむしゃらに火球を投げるが、鱗の覆う腕で全て弾かれてしまう。

「畏がないなら終わりだなあ！」

高笑いが響く。手を広げ、彼はセウラの胸に掌底を押し当てた。

「!?!」

セウラの目が飛びださんばかりに見開かれた。おかしくなった呼吸は、それで完全につつかえた。

(いき、が……)

ハスナはセウラの顔面をつかみ、地面へ叩き付けた。

ハスナの口元がゆるんだ。

セウラが今の攻撃で、シュレの《雲》を手放してしまっていたのだ。地面の上に無造作に転がっている。

「く、くそ……」

這いずってその《雲》を拾いに行くセウラの眼前に、彼は降り立った。

「邪魔だ」

残酷にセウラを蹴り上げ、遠ざける。

そしてハスナは、足下の《雲》を拾った。

## 第七章 セウラ、その力

### 第七章 セウラ、その力

時間は、少し遡る

リリが去ってしまった後の西の丘。

リリの攻撃の衝撃からなんとか立ち直ったユリノに縄を解かれたフリルデは、身体の痛みも忘れて弟を抱き上げた。

そこに至って、はじめてフリルデは先ほどの激情がちょっとやり過ぎだったことに気がついた。

ティルの怪我は、ほんのかすり傷だった。出血もすでに止まっている。

おそらく縛られた状態で放り出されたときに、すりむいたのだろう。

「……………」

「あらあ」

声もなく弟の寝顔を見ていると、ユリノの間の抜けた声が響いてきた。

フリルデは顔だけで振り返った。その表情が、一瞬固まる。

村が、明るかった。

丘から見下ろす村の一角が、激しい光に包まれている。

「たぶんルルナのトウルだろうね。がんばってるなあ、ルルナ」

ユリノは感慨深げに呟いている。

（ルルナ……………」

光の原因がルルナであることは、フリルデにもすぐにわかった。ルルナ得意の光と風のトウルを操り、おそらくリリと戦っているのだ。

（セウラのバカが……………」

フリルデは顔をしかめた。

戦いの嫌いなルルナに戦わせて、いったいどこでなにをしているの  
だか。

(まさか、やられちゃったんじゃないでしょうね……)

ユリノが振り返った。

「フリルデ、わたしはそろそろ行かせてもらおうね。しばらくティ  
ルクんとここで休んで。後で迎えに来るから」

「え、あ、わたしも」

行く。そう思ってフリルデはティルを抱えて立ち上がるうとした。  
その瞬間、目が眩んだ。ティルごと倒れそうになるのをユリノに  
支えられる。

「だいじょうぶ？」

「すみません」

フリルデは強がるようにユリノから遠ざかった。いったんティル  
を地面に下ろして、乱れた息を整える。

「そんな身体で、無理しないで」

「だいじょうぶです」

口では強がったが、実際、疲れ果てていた。

朝から、セウラ対策のために森に半日かけて結界を張ったのだ。

それだけでも重労働だったが、その後にセウラとの『決闘』があ  
りハスナとの戦いがあった。

今でも《虚空の叫声》により受けた傷はほとんど治っていない。

体中、息をするたびすぎずき痛む。

「行かせてください」

それでもフリルデは、強がった。

「わたしも、まだ戦えます」

「やっぱりだめ」

ユリノは首を振った。

「ちよつとの無理ならよろこんでもらうけどね。今のあなたは  
ハッキリ言ってぼろぼろ。気がついてないのかも知れないけど、全  
身血まみれだよ。中途半端に眠って回復したつもりでいるのなら、

それは甘い考えだわ。少しは自分の身体の気も使いなさい」

「大丈夫ですよ！ 戦えま」

言いかけたとき、ユリノの平手が飛んだ。

頬を押さえて絶句するフリルデに、ユリノはグッと顔を近づけて言った。

「だめって言うてるでしょ」

その目。常ににこやかだったその細い目から、微笑みが消えていた。

「一体、なにをそんなに焦っているの、フリルデ」

「……」

フリルデは目をそらした。

「逃げないで」

ユリノは胸ぐらをつかんで無理矢理に視線を目の前に持って来させる。

「そんなに、いや？ セウラに負けるのが」

ユリノの口からその言葉が漏れたとたん、フリルデの全身に猛烈な震えが走った。

蒼白になるその顔に、ユリノはなおも言葉を重ねる。

「いつか追い越される。追い越されたら絶体になわなない。そう思ってるんじゃないの？ フリルデ」

「やめてよ先輩！」

フリルデは悲鳴を上げ、ユリノの腕を手で弾いた。その勢いでひざから崩れ、しりもちをつく。

「やめないわ」

ユリノは腰を落とし、震えるフリルデの肩に手を当てて、続けた。「そんなに、あの子のことが怖いのか？」

「……」

怖い。凶星だった。

セウラの才能。いっしょに育ったのだから、気がつかないわけがなかった。

確かに、不器用だ。なにをやるうとしても、すぐに過剰な炎を出す。

基礎中の基礎である炎のトゥル以外はまるでつかえない。

バカの一つ覚え。あんなことでは、実践ではとても使い物にならない。無駄に被害を出すだけ。

(だけど……)

不器用なだけなのだ。

彼女の操るトゥルの威力は、想像を絶した。

フリルデには、どうやってもあのような強力な炎は出せない。物理的に無理とすら思う。

一つの空間に存在するリップルには、限界がある。

どんなに卓越したトゥーラであろうとも、リップルの限界を超えてトゥルを使うことなど不可能なのだ。

にもかかわらず、彼女は平気でその限界を超える。

それこそ広場を軽く作ってしまうほどに、リップルを過剰に操ることが出来る。

使いこなせていないだけなのだ。

いつになるかは分からないが、いずれは使いこなせるようになるだろう。

そしてセウラは自分を追い越す。ルルナも追い越す。先輩も、師匠すらもだ。

だれも、かなわなくなる。

それが気に入らなかった。自分がどんなに努力しても、セウラの生まれ持った才能には歯が立たない。

(だから……)

今のうちに潰そう。そう思い立った。

ユリノの目が届かない今日しかなかった。半日かけて森に結界を張り、セウラをおびき寄せて『決闘』を仕掛けた。

今のうちにやっつけて上下関係をハッキリしてしまえば、もう、あいつは一生自分の下だ。

勝てばいい。手段なんてかまわない。

あらかじめ結果を張って『決闘』を仕掛けることが卑怯だなんて、言われなくてもわかっていた。

しかし、どうしようもなかった。

負ければ一生セウラには勝てない。絶体勝たなければならなかったのだ。負けるわけにはいかなかったのだ。

だが、結果は負けたようなものだった。

半日かけて作り上げた完璧な結界のなかで、セウラは炎を作り出した。

そんな化け物に、どうやって勝てるというのか。シュレが来なければ、セウラに焼き殺されていたかも知れないのだ。

「なんで勝てないんだよ。私のなにがいけないって言うんだ……」  
呻いた。地面を思い切りつかみ、両目を結んで、フリルデは呻いた。

「わたしはずっと一番になるために修行してきたんだ。それなのに、ルルナにも、セウラにも勝てないって、それじゃあわたし、バカみたいじゃない……」

涙が、こぼれた。

「フリルデ……」

ユリノは、うつむくフリルデの頭をそっと抱きしめた。

「あなたがセウラに劣等感を持っていることは、わかっていたわ。でも、決して悪いことではないと思ってた。あなたはセウラに負けないように努力していたから。お互い磨きあって、立派なトウーラになってくれると、信じてた」

「……」

「でも、知らなかった。あなたが、そこまで思いつめてたなんて。ごめんね。もつと早く、聞いてあげるべきだったね」

ユリノはフリルデの頭から身体を離した。フリルデの両肩をつかみ、真剣な眼差しで、その双眼をしっかりと見つめる。

「このことは、出来るだけ黙っていようと思ってた。でも、あなた

がこれを聞くことで、また思い直して一歩踏み出してくれると信じてるから。セウラのことを、今までと同じように見てくれると信じてるから。教えてあげる」

「先輩……？」

フリルデは、恐れるように口を開いた。

「一体、なにを」

「セウラのこと。あの子は、特別な」

「

## 第七章 (2)

再び、決戦の場

星が美しく瞬き、月の光が地上を鮮明に照らし出している。

いつの間にか、夜になれば必ず姿を現し、天空をゆがませるリップル現象が、見られなくなっていた。

地上でのトウルによる激しい戦いの連続により、リップルが大量に消費され、その姿を消してしまったのかもしれない。

戦いが始まり、ずいぶんと経つ。夜も、もうじき明ける。

「せえちゃん！ だいじょうぶ！」

避難して遠目から戦いを見ていたルルナが、血相を変えて走ってきた。

呼吸がつまり、身動きのできないセウラの身体を抱き上げる。

「ルル……ナ、危ない、逃げる……」

息をつまらせながらも、もがくようにセウラは首を振る。

「しゃべらないで！」

ルルナの手が、セウラの胸に当てられる。ぼんやりとした光が輝き始める。

「友情、というのでしょうかね、そういうのを」

二つの《雫》を手に入れたハスナの表情は、勝者の余裕に満ちていた。

手に持たれたシュレの《雫》に月光りを反射させて遊びながら、

二人のやりとりを上空から見下ろしている。

「いやはや、うらやましい限りです」

が、その目つきが、急に冷めた。

「でもね。むかつくんですよ。そういうのは！」

その翼が、大きく広がる。羽ばたくと、たちまち凄まじい突風が吹き出した！

周囲に生えていた木は根こそぎ飛ばされる。地面はめくれ、転が

ついていた石は狂ったように中空で暴れ回る。

「せえちゃん、がんばって」

まだ完全に回復していないセウラを守るかのように、ルルナは両手を広げ、風を起こした。

ハスナの突風に比べればそよ風にも近い、まったく無力な風だった。

それでも、ルルナの全霊をかけた風は、確実にハスナの突風を食い止めていた。

「ふーん。がんばるねえ」

ハスナはルルナのがんばりを、鼻で笑う。翼を羽ばたかせながら、両腕を大きく広げた。

「《虚空の叫声》」

得意のトウルを唱える。

風切り音に混じり、バン！ バン！ と、耳をつんざく炸裂音が連続で響きわたる。

《虚空の叫声》を混ぜ込まれた突風は、触れるものを切り刻み、破裂させ、そして吹き飛ばしていく。

ルルナの悲鳴が上がる。容赦のない空気の爆発を打ち付けられ、その身体が見る見る血に染まっていく。

「まだだ」

ハスナは、口から炎を吐き出した。炎は風に煽られ、勢いよく燃え盛った。

みるみる突風は真っ赤に染まり二人の所へ、向かってくる。

「うあああああ！」

ルルナは今までセウラが聞いたこともないような大声を上げ、気合いを込めた。

いつそう風が強くなる。どうにか炎を帯びた風は逸れていくが、それも時間の問題なのは明らかだった。

「ルルナあ！」

ルルナのおかげで呼吸はなんとか回復した。セウラは力を振り絞

って立ち上がる。

「無茶はやめろ！ 逃げろ！」

「せえちゃん。逃げ場なんてないよ」

ルルナは振り向かずに行った。

「だから、あいつをやっつけちゃおうよ」

「え？」

「大丈夫。せえちゃんなら、勝てるんだから。せえちゃんがどれだけすごいのかは、知ってるよ。わたしも、ふうちゃんも」

「すごいって……、わたしは、全然……」

「だから。落ちついて。息を吸うの。大きく」

「ルルナ、いったいなに言ってるんだ！」

「大きく息を吐いて。また、吸って」

「だからなに言ってるんだよ、ルルナ！」

「早く……。落ち着くの。大事だから」

「落ち着くって!?!」

セウラは目を丸くした。

この期に及んでなにを考えているのかと、その暢気さにあきれれる思いだった。

いきなりお世辞を言ってきたりと、本当におかしくなってしまったのかと、頭の中がぐるぐる回る。

「ルルナ、なに言ってる……」

「目を、つむるの。おなかの力を抜いて、大きく息を吸うの」

ルルナの声が、苦痛にゆがんでいる。

(立ってるのも、辛いはずなのに……)

セウラは、目をつむった。

「ルルナ、わかったよ」

すう、はあ。息を大きく吸い、大きく吐く。それを何度も繰り返す。落ち着くまで。落ち着くまで……。

(そっいえば……)

さっき森の中で木を燃やしてしまったときも、ルルナは同じこと

を言っていた。

いや、それ以前からだ。何度も、何度も。

（冷静に。師匠は、先輩は、わたしにいつも言っていた。わたしはそれを守れずに、感情のままに、ずっと力を使い続けてきた……。あのときだって、ルルナはこうやってちゃんと心を落ち着かせる方法を教えてくれたのに）

意図せず

セウラのつむった目から涙がこぼれ落ちていた。

（わたしって、こんなにまでみんなに迷惑かけなくちゃ、まともに力もつかえないんだな。シュレにあんなにすごい力をもらったのに、負けちゃったし。フリルデがバカにする気持ちもわかるよ。バカだね。バカだ……）

「そろそろ、あきらめるんですね！」

ハスナは周囲に無作為に風を飛ばすのをやめ、セウラたちへと力を集中させた。

ドン！ と爆発を思わせる突風が、たたきつけてくる。

「うっ……！」

耐えきれず、ルルナの身体が大きくのけぞった。

ハスナはトドメとばかりに、シュレの《雫》をルルナに向けた。

「中身から破裂させてみましょうか！ 虚空のきよ」

ハスナがトウルを使いかけた、その時だった。

カツ！ と、シュレの《雫》が、激しい紫色の光を発した！

強烈なまぶしい光。一瞬、すべての視界が真っ白に染まる。

「なんだっ！？」

ハスナはひるみ、突風が弱った。

ただの光だった。攻撃力も無ければ、ハスナの力を封じたわけでもない。

だが、それで十分だった。

（ありがとう）

まぶたを閉じていても、その光は感じられた。だれの光であるか

は、考えるまでもなかった。

( だけど、もう迷惑はかけないよ。みんなを守るから。シユレも、助けるから！ )

目を開いた。

「ルルナ、もういい」

「せえ、ちゃん……」

その場に崩れ落ちそうになるルルナを、セウラが抱きとめる。

「ハスナ、おまええ！」

ギツと、ハスナを睨みつける。

「ごさかしい！」

ハスナは弱った風を、再び煽る。炎を含んだ突風が再び二人に迫ってくる。

セウラはルルナの腕をつかみ、上空に飛んでそれをかわした。

「また、飛んでる……」

疲れ切った表情で、ルルナは弱々しく微笑んだ。

「やっぱり、すごいね、せえちゃん」

「……」

今度は、《雫》の力も借りていない。にもかかわらず、セウラは空を飛んでいた。

どうして。そんなことは、セウラにもわからなかった。考える余裕もなかった。

素早くルルナを別の場所に避難させると、再び飛び上がった。

「きさま！ まだなにかを隠しているなあああ！」

ハスナは大きく翼を広げ、銀色に光る爪を剥き出しにして、セウラへと襲いかかってきた。

「……」

セウラは迫り来るハスナのことをジッと見据えた。大きく開いた右手を、ゆっくりと振り上げる。

すると、手の周りがボンヤリと揺らめき始め、まるで波紋が水面に広がるように、周辺一帯に広がっていく。

「な、これは!？」

ハスナの身体の周りにも、それはまとわりついた。彼は血相を変えてそれから逃れようとした。が、それよりも早く

白い炎が、燃え上がった!

「あ……」

ハスナは思わず、呻いた。

炎は瞬時に消えた。それこそ瞬くほどの刹那の時であったが、それだけで、事足りた。

「ばかな、なんと……」

鮮烈な白い炎が消えた後には、全身を真っ黒に焦がしたハスナの姿があった。

角は風化したように崩れ、漆黒の翼は破れていた。

全身はすべての肉がそぎ落とされたかのように枯れ、その顔は年老いたようなしわ深いものに、変わり果てていた。

無惨な姿。一瞬にして、百歳も年を取ってしまったかのようにだった。

「……」

彼は呆然としたまま、一瞬空中にとどまろうとした。

が、叶わなかった。

ふら、と身体が揺れると、手から、額から、二つの《雫》がポロリと落ちた。

その後を追うように、ハスナの身体も地上へ墮ちた。

「あ、ああ……」

地面に身体を埋めてもなお、ハスナは途惑いに満ちた目を見開いたままだった。

自分の身体のことすら忘れてしまったかのように、ひたすら空を眺めて、呻いていた。

「あれは……」

月が見えなくなっていた。すべての星の瞬きが消えていた。

空の色が、変わっていた。

上空を、セウラの身体から発散されたすさまじく巨大なものが、覆い尽くしていたのだ。

それはまるでカーテンのように、時にゆっくりと、時に激しく、まるで波を打つかのように、ゆらゆらと上空をたゆたっている。

いわゆる、リップル現象。

それは、この世界に住む者にとっては見慣れたもの、あたりまえに空にたゆたっているものの、はずであった。

だが

「あれは、リップルの、最高位の色、本来の、姿……」

ハスナは震える唇で、つぶやいた。

「ヴァイオレット、リップル」

揺らめくリップルは、紫色に輝いていた。

## エピローグ

### エピローグ

紫色のリップルが空を覆ったあの夜から、一週間が過ぎた。

冬も近いというのに、今日はとても暖かい。

洗濯物があちらこちらではためいている中を、子供たちが声を上げて走り回っている。

村の人々の顔つきもどこか柔らかくなり、時間も心なしかゆったり流れているような、とてもほのぼのとした昼中であった。

「眠いわ」

そんな小春日和の村道で、不機嫌を振りまいている娘がいた。

「まったく暢気なものね。わたしが毎日こんなに苦労してるっていうのに」

フリルデであった。

しかめっ面の娘は、自分の前を先導するように歩くティルの背中に向かって、ぶつぶつまくし立っている。

あの夜の出来事以来、フリルデには一つの仕事が出来た。

ユリノの家に安置されているリリの《雫》を、凍らせてやることである。

力を使い果たし、なおかつハスナに力を吸い取られたリリの本来の姿である《雫》は、すっかり色をなくし、ヒビが入ってしまった。いた。

リリはフリルデがリップルにより作り出した氷から、力を吸い取って命を永らえている状態だった。

しかしリリの旺盛な『食欲』を満たすほどに凍らせるとなると、一日の体力の大半を使い果たしてしまう。

にもかかわらず、ユリノは容赦のないトゥルの特訓を課してくるので、フリルデは常に疲れ果てていた。

「いったいいつまでこんな事続けなければいけないわけ？」

「ヒビが消えるまでだろ。ヒビが消えれば、あとは自力で回復できるって、ユリノさんも言ってたじゃん」

「だからヒビがいつ消えるかって聞いてんのよ。だいたい、なんでわたしが一人でこんな仕事やらなきゃならないのよ」

「自分からやるって言い出したんだから、愚痴るなよ」  
「うるさいわね」

実際、リリの治療をやると言い出したのは、フリルデ本人だった。  
(仕方ないでしょ……)

西の丘で、リリにはひどいことを言ってしまった。

テイルを掠つたのは事実だったし、リリをまだ許したわけではなかったが、多少感情的になりすぎたと反省はしている。

ハスナに利用され、裏切られたリリの事情を知ってからは、良心の呵責も少しは湧いてくる。

罪滅ぼしではないが、リリを他の者にまかせる気にはなれなかった。

「なんか言えよ」

弟の言葉を見無視しながらボンヤリと歩いていると、ふと、かたわらに建っている小さな家に目が止まった。

セウラの家だ。彼女はここに一人で住んでいる。

窓にはカーテンが掛かっていて、中の様子を見ることは出来ない。セウラはあの日、ハスナを倒した後に気を失って以来、一度も目を覚ましていない。今も、ルルナに看病されながら眠っているはずだ。

「ちょっと!」

庭に入って家の中をのぞき込もうとするフリルデを、テイルはあわてて腕をつかんで引き留めた。

「なにやってんだよ」

「お見舞いよ」

「ただの覗きだろ。趣味の悪いことすんなよ」

ティルが無理矢理道に連れ戻す。

「バカみたいに寝てるのが悪いのよ」

「言い過ぎだろ。セウラさんは村を救ったんだからな。疲れてるんだよ。少しは同情してやれよ」

「なによあんた」

にやり、とフリルデがいやらしい笑みを浮かべる。

「肩を持つのね。あいつのことが好きなの？」

「なっ！」

たちまちティルの顔面が真っ赤に沸騰した。

「ふっざけんなよ！ そんな話してるんじゃないだろ！ セウラさんを心配するなんてあたりまえだろ！ 心配してないのはおまえだけなんだよ！」

「心配ねえ」

フリルデは、眉をひそめた。

(早く回復しろよ、バカ……)

セウラは特別らしい。西の丘で、フリルデはユリノから聞いた。

なにか底知れない力がセウラの身体の中に存在していると、師匠がユリノに話してくれたらしい。

そしてそれを裏付けるようにあの夜現れた、空一面を覆い尽くす紫色のリップル……。

ユリノはなるべく噂が広がらないように努めているようだが、狭い村だ。

遠巻きに戦いの様子を眺めていた者も少なからずいたようで、セウラの仕業だという噂はすっかり広まってしまっている。

長老の家では大人の男達が毎日のように会合が開き、セウラをどうするか話し合いがなされている。

連中は、彼女のことを怖いらしい。

今回の事件をきっかけとしてよくないことが起きるのではないかと、ひどく心配している様子だ。

(あいつは追放されるかも知れない……)

いや、追放ならばよい方だ。

昨日、見慣れないローブを纏った連中が数人、会合の場へ行くのをフリルデは見た。

あきらかに”都市”の連中だ。

トウルに関する研究機関の集まる神殿都市カラルあたりにも、連れて行かれる可能性もある。

そうなれば、セウラは死ぬまで研究材料だろう。

(冗談じゃない)

あいつは私が守る。

あの丘で、ユリノと約束したのだ。

セウラの力を恐れ、差別する人間達から。その力を利用して、連中から守る。

彼女をいじめる全ての者達から、守ってやると。

(あいつをいじめていいのは、わたしだけなんだから……)

フリルデは、薄暗く微笑んだ。

「あんな、あいつのこと心配？」

「え、あ、うん……？」

いきなり話を振られて、テイルは首を傾げるように頷いた。

「じゃあ、手伝って。いったん家に帰って用意してから、先輩の家に行くから」

フリルデの足が速まる。

「先輩って、ユリノさん？ 今、行ってきたところじゃ？」

「もう一回行くの。午後からお菓子の作り方を教えてもらって約束してるから」

「お菓子！ おまえがお菓子を作るって!？」

「うるさいわね！」

フリルデはテイルの頭を思い切りこづいた。

「セウラには早く元気になってもらわなくっちゃ困るからね。お見舞いを作るのよ」

フリルデがセウラの家から遠ざかっていった、ちょうどその時は――

として、セウラは目を覚ました。

全身に鳥肌が立っている。フリルデが優しくしてくれる夢を見たような気がしたのだ。

「せえちゃん、よかった!」

「ひい!」

いきなり何かが抱きついてきたので、思わず悲鳴を上げた。フリルデかと思ったのだ。

が、抱きついてきたのは、フリルデではなくルルナだった。

「ルルナ……?」

「よかった、起きたんだね!」

未だに状況のわかっていないセウラは、目に涙を浮かべて自分の回復を喜ぶ娘の顔をぼんやりと見返す。

「もう、一週間だよ!　せえちゃん、一週間も眠ってたんだよ!」

「一週間……?」

「もう、目を覚まさなかったらどうしようって……どうしようって……」

ルルナはセウラの胸に顔を埋めて、肩を振るわせている。

「あ、ありがとう。看病してくれてたんだ……」

でも、全身が痛いので、しがみついて泣きじゃくるルルナをやりわりと押し返す。

「それで……、みんなは、無事?」

「うん、無事!」

ルルナは目元の涙をぬぐいながら、首を大きく縦に振った。

「みんなせえちゃんのおかげだよ。せえちゃん、すごかったから」

「え、うん……」

セウラは翳った顔を隠すように、うつむいた。そのまま黙り込む。「どうしたの?　どこか痛いのか?」

「ええと、実は、あんまりよく覚えてないんだ」  
「え？」

ルルナは首を傾げた。

「覚えてないって、あんなにすごいことがあったのに？」

「うん」

申し訳なさそうに、うなづく。

「よかつたら、教えてくれないかな」

「いいよ」

ルルナは、あの夜、セウラが自分を助けてからハスナを倒すまでの一連の出来事を、身振り手振りを交えて少し興奮気味に説明した。

「紫色の、大きなリップル……」

教えてもらっても、セウラはあまり元気にはならなかった。

「やっぱり、忘れちゃったんだね」

「え、うん」

「でも、みんなすごく感謝してるよ。わたしなんて、もしかしたら殺されてたかもしれないんだから」

「うん……」

その後、この一週間であったことなどをいろいろと聞いているうちに、日は暮れた。

今日までルルナはこの家に泊まっていたらしく、今日も泊まって面倒を見ると言ってくれたが、それは遠慮してもらった。

さんざんかセウラの心配をした後、ルルナは名残惜しそうに帰って行った。

その足音が遠くなったのを確認して、ようやくセウラは大きく息をついた。

「ルルナ、ごめん」

つぶやくと、顔をクシャクシャに歪めた。

「ウソ、ついちゃった……」

本当は、記憶を失ってなどいなかった。

確かに、あの時は必死すぎて飛んでしまっている記憶もあるが、

だいたいのは覚えている。

ただ事じゃない力が自分の身体から発散されたことも、忘れていない。忘れるはずがない。

怖い。

その気持ち、セウラにウソをつかせた。

もし、自分がすっかり思い出してしまったら、ルルナの、フリルデの、村のみんなの目つきが変わるのではないか。

楽しかったこの村での生活が、なくなってしまうのではないか。ならばしらばっくれてしまった方がましだと、思わず考えてしまった。

自分が覚えていようといまいと、周りの認識は変わらないだろう。そのくらいはわかる。

だが、ほんのささやかでも抵抗したかった。抵抗せずには、いられなかった。

(わたしって、なんなんだよ……)

薄暗い部屋の中にも、気が滅入るばかりだ。気を紛らわせるためにも、外に出てみようと思った。

だるい身体を持ち上げて、衣服を着替えて外に出る。

外はすっかり日が暮れ、もはや人の姿も見られない。

(シユレは、どうしてるのかな)

ルルナによれば、シユレはあの夜から二日ほど家の中にこもって傷を癒していたが、三日目にはいつも通りの姿を見せて、今では何事もなかったかのように剣の練習に励んでいるらしい。

話を聞いた限りでは、ルルナはシユレの正体には気がついていない様子だった。

「シユレ……」

不意に涙があふれてきそうになったので、セウラはそれを誤魔化すように走り出した。

全身がいまにも壊れそうなほどに痛かったが、それでも走った。

(シユレ、ずっとウソをついてたんだよね……)

知られることが恐かったと言っていた。

今の自分と同じ心境か。

いや、自分のそれとは比べものにならないだろう。

（わたしが小さい頃から、ずっと。いつも。シュレは、不安だったんだ。ずっと、ウソをついていることの罪悪感、知られること不安と戦いながら……）

あの笑顔を絶やしたことはない青年の心の中に、そこまで深い悩みが燻っていたのだ。

（バカだ、わたしは……）

励ますことも元気づけることも出来ずに、なにも知らずにいた自分を呪いたくなる。

「でも、シュレ……」

セウラは、つぶやいた。

「人間じゃない。そう告白したらわたしがシュレのことを嫌いになるとでも思ったの？ わたしはどんなことがあったって……」  
がむしゃらに、駆けた。

その足は、シュレの家の方角へと、向かっていた。

## エピソード (2)

「ごめんね、こんな時間に来ちゃって」

シユレの住まいである村はずれの小屋には、ユリノが訪れていた。夕飯時だったので、ちょうど自分で食べるために用意していたキノコのシチューを、シユレはユリノにもよそった。

ユリノは大喜びで、美味しそうに食べている。

「ほんとはもつと早く来たかったんだけどね。なかなかお菓子が出来上がらなくてねえ」

「お菓子ですか？」

「うん。フリルデといっしょに作るって約束してたの。それでクッキー作ってたんだけど、フリルデが氷付けしちやって大変だったわ。結局明日また作り直し」

「こ、氷付けですか？ クッキーですよね？」

「え、うん。焦がしそうになったのを、フリルデが無理矢理冷やそうとして。トウルで」

「……………」

「あ、そういえば、リリのことだけどね」

ユリノは思いだしたようにその話題を切り出した。

「だいぶ『綺麗』になったわよ。フリルデががんばってくれてるおかげだね。ハスナの方はまだわからないわね。死んだように眠ってるわ。ほんとにあのまま捨ててやりたい気分だけどねえ。そういうわけにもいかないから。……それにしても、ほんとに美味しいわねえ」

シチューをすすりながら、ユリノは言う。

「いいわねえ、こんな美味しいシチューが作れて。今度教えてくれないかな？」

「え、ええ、いいですよ」

「ありがとう。たのしみ」

そう言ったきり、いつまでも楽しそうにシチューをすすっている。シユレはぎこちない笑顔でそれを眺めていたが、しばらくの後に思い切って口を開いた。

「あの、いったいどのような用件で……」

リリのことだけを話しに来たとは、シユレには思えなかった。

「あ、ごめん。そうだったわね。あまりにも美味しいから。ちよつと待っててね」

結局話し始めたのは、シチューを全部平らげた後だった。

「聞きたいことがあつてきたの」

ユリノは姿勢を正し、ハンカチで口をぬぐいながら、顔から微笑みを消した。

「今まであやふやなままだったけど、この際はっきりしておかなきゃと思つてね」

「……」

ユリノに見つめられて、シユレは身を引き締めた。

普段彼女の細い目は、常に笑っているかのような朗らかな印象を振りまいているが、微笑みを消すと威嚇するような鋭さを帯びる。

それはまさに別人に変貌するかのごとくで、その目で見られただけでも、背筋がゾツと寒くなる。

「単刀直入に聞いわ。目的が聞きたいの。いったいなにが目的で、この村へ来たのか」

「……」

「きみもリリと同じだよ。封印を解かれて世界中に散らばったグーラの部下の一人。いわゆる《ミレス》」

「それは……」

あけすけに正体を言われて、シユレは探るようにユリノを見返した。

「セウラに、聞いたのですか？」

「いいえ」

ユリノは首を横に振った。

「セウラはまだ寝ているわ。それに、あの子がきみの嫌がることを言うと思っ？」

「……」

「わたしは、師匠から聞いたの」

「義父から……？」

義父。彼女たちの師匠は、同時にシュレや村のトゥーラ達の父親代わりでもあった。

シュレもトゥーラにこそならなかったが、この村に来て以来、ずっと師匠に育てられた。

「しかし、義父にも僕は話した覚えは……」

「すごい人だったから。たぶんわかってたんだと思うよ。体調を崩して、もう先がないとわかったとき、師匠が一番年長の弟子であるわたしに、色々なことを話してくれたの。きみについても。セウラのことについても。『すべてはわたしの思い過ごしかもしれないが……』という前置きをしてね」

「そうだったんですか」

「わたしは師匠の後を継げるとは思ってはいないけど、せめてあの子たちが立派に成長するまでは、この村を守らなきゃならない。そのためには、すべてをはつきりさせておきたいの。だからシュレくん、話して。もちろん、誰にも話したりはしないわ」

「……」

「辛いことはわかってる。でも、もし話してくれないのなら、わたしはきみをこの村から追放しなければならぬ」

ユリノは、にらみつけるようにシュレを真っ正面から見つめる。

その視線。シュレは微かに身を震わせた。

この村のトゥーラの中では最年長であるとはいえ、まだ二十歳を少し過ぎたばかりのユリノである。

トゥーラとして見れば、まだ小娘と言ってもいい若さだ。

まだまだ学ばなければいけないことも、鍛えなければいけないところもあるだろう。

だが、師匠の突然の死により、自らの修行をあきらめて、村のために尽くさなければならなくなった。

頼る者も教えを請う者もない中で、村の守護を一身に背負い、後輩の面倒も見なければいけないのだ。

その重圧は、いったいどれほどのものなのか。

そして、その気迫。

村を守るためならば、一切の妥協を許そうとはしない彼女の泣きそうなほどの気迫が、その瞳には宿っていた。

追放するというのは、脅しではないだろう。

話すのを拒否すれば、ユリノは自らの命をなげうってでも、シュレをこの村から消そうとするはずだ。

「……わかりました」

シュレは大きなため息と共に、観念した。

「ありがとう」

ユリノは頭を下げた。

少しの沈黙の後、シュレは打ち明ける。

「その通りです。僕も、《ミレス》の一人でした。本当の名は、シユレルダ。封印を解かれたとき、力をすっかり失った子供の姿で、僕はこの世界に落ちました。記憶も意識もほとんどなく、頭の中に残っていたのは『シュレ』という自分の名前の断片のみでした。ひどい渴きを覚えながら、大陸中をさまよいました。本能が《ライゼ》に惹かれたのかも知れませんが。長い放浪の末にたどり着いたのが、この村でした。瀕死になっている僕を助けてくれたのが、幼いセウラでした。彼女といると、身体の渴きが無くなった。それがどうしてだか、僕はすぐにわかりました。彼女と出会ってすぐに、記憶を取り戻したから……」

シュレは目をつむった。

「彼女が《ライゼ》だったんだ……。源泉と言う呼び名は、ただの例えにすぎない。本当は、リップルを作り出すことの出来る人間のことを指すんです。僕は彼女のその力に触れて、記憶を取り戻し、

同時に、彼女のその悲運も知ってしまった……。魔王と呼ばれた彼、グーマも《ライゼ》だったから」

「グーマ……」

「ユリノさんなら、もうわかってますよね。セウラは自分がリップルを自由に操れないことを才能がないからだと思っただけ、それはちがうということ。力がありすぎて、もてあましてるだけだということ。あの夜、セウラからあふれたヴァイオレットリップルは、作り出されたばかりの凝縮されたリップルです。それを用いたトゥルは、空中に四散し薄まったリップルを用いる通常のトゥルとは、威力も効果も桁が違う。いつか彼女は、魔王グーマにも匹敵するほどの強大な力を持つようになるでしょう」

「……」

「僕は、僕の命を助けてくれたセウラを、命に代えても守りたいと思いました。彼女が普通の人間ならあたりまえに出来る、平凡で幸せな人生を送ることは、たぶん無理だから。おそらくいずれ、《ミス》を始めとする色々な者達が、彼女を手に入れようと、もしくは抹殺しようと、やってくるだろうから……」

涙声で、続ける。

「僕はあなた達に迷惑をかけるつもりはありません。ただ、セウラのそばにいてあげたいんです。セウラを悲しませる者がいなくなるまで、ずっと守っていてあげたいんです……」

「シュレくん」

ユリノは不意に立ち上がった。

「いいよ、シュレくん。きみの気持ちはわかった。もう、このことは二度と聞かないし、誰にも言わない。いつまでも、あの子を守ってあげてね」

ユリノの顔に、朗らかな笑みがあふれた。

シュレはびっくりしたようにユリノの顔を見つめた後、

「はい！」

と身体を折り曲げるように大きく頭を下げた。

「ごめんね、わたしも出来ればこんな事はしたくなかった……」

「わかってます。大変ですね」

シユレの、涙顔がほころぶ。

「わかってくれる？　じゃあ、たまにはわたしの愚痴も聞いてくれないかしら。これでも色々大変で。フリルデはすぐにセウラをいじめるし。ルルナはぼんやりだし」

「ええ、それはもちろん　？」

言いかけて、シユレは小首を傾げた。

ユリノが台所のほうへと向かっていき、そこの窓を開いたのだ。

「なにをしてるんです？」

「もちろん帰るのよ」

「な、なんでそんなところから……」

ユリノがいきなりスカート裾をたくし上げて窓に足をかけたので、シユレは思わず目をそらした。

「今度は、シチューの作り方教わりに来るわね。じゃあ、しっかりね。大丈夫、悪いことはなにも起こらないと思うから」

「……？」

そういつて、窓を乗り越え外に出て行ってしまった。なぜか、妙にあわてた様子で。

（あの人も、変わった人だな……）

開きっぱなしの窓を眺めながめっていると、ふと、こちらの方に近づいてくる足音が耳を叩いた。

シユレはハツとしてドアのほうへと振り返った。

弾むような元気な足音。心地のいい、聞き慣れた足音。少し聞いただけでも、それが誰だか分かった。

（セウラ……）

家の前で、その足音は止まった。

いつもなら、すぐに「シユレいる！？」と大きな声と共に、ドアがノックされる。

だが今日は、声もノックもなかなか響かなかった。

心臓が、高鳴った。

「いったい、セウラはなにを思っているのか。」

最初に、どう声をかければいいのか。どんな顔をすればいいのか。逃げ出したい衝動が、身体を駆け抜ける。

ユリノが開け放ったままの窓の方に、目が向いた。

「いや……」

シユレは邪念を振り払うように、首を振った。

（構わない。どう思われていようと、僕は、構わない。偽っていたことを、憎んでくれてもいい。人でない僕を、拒絶してくれてもいい。ただもう一度だけでいい。きみの元気な姿を、僕は見たい……）

悪いことはなにも起こらないと思うから

ユリノが去り際に残した言葉。

（そうだ。悪いことは、なにも起こらない）

言い聞かせるように、小さく呟く。

そしてドアのノブに、手をかけた。

ヴァイオレットリップル・完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6531b/>

---

ヴァイオレットリップル

2008年11月7日08時39分発行